



目次

「針葉樹十一号」の前夜……………石原 脩	2
東南チベット・四川踏査行	
ゴルジュの国の未踏峰から	
大渡河の知られざる山々へ……………中村 保	4
キリマンジャロ紀行	
……………佐藤恭・遠藤晶士・蛭川隆夫・小野肇	
雪山讃歌……………金子 晴彦	8
わー、アルプスみたい！……………若林 貴之	17
十三参りで飯豊登山……………斎藤 誠	20
アジア往復旅行1年2カ月……………田形 祐樹	23
雨飾山ふとんびし右岩峰中央稜	
「忠実リッジ」ルート登攀……………山田 秀明	25
会員だより……………	29
新年会への返信八ガキから……………	29
中村保氏、日本山岳会名誉会員に……………	30
芦安に針葉樹文庫開設……………	30
月見の宴……………	31
ヨーロッパ帰国報告……………中村 保	31
三月会通信（10月～2月）……………	32
編集後記……………	36
表紙写真「キリマンジャロ遠望」撮影／小島和人	

発行日 2009年4月10日
発行者 針葉樹会
印刷所 ヤマノ印刷㈱

針葉樹会報 第 114 号

編集人 小島 和人
〒241-0817
横浜市旭区今宿町 2-60-1
会報幹事／小島和人、井草長雄
川名真理

シリーズ わが現役時代

「針葉樹十一号」の前夜

石原 脩（昭和30年卒）

『針葉樹』には10号から11号まで、足掛け16年の断層がある。11号には、その空白を埋める各年代の活動概要が、5人のOBによって執筆されている。

その冒頭で、大塚先輩は、「昭和14年に10号を発刊するとき、もう次はないと考えたとされ、戦中戦後の物資不足、腹を空かせている中、登る人も稀な山は静かに眠っていた。これからの話は、この断層最後の2年間の思い出だ。前号の中村正司さんの文章と合わせて読んでもらえれば、この混沌たる時代の理解が得られるかも知れない。」

昭和26年（五人の新人の話）

朝鮮戦争が始まった翌年の26年に、須山・白川・奥野・勝田・石原の5人が入部した。チーフ・リーダー小泉さんの回想によれば、戦後5年を経てこの時の新入部員の殆どが、

高校時代に登っていて、部に入る動機もそれまでとは違っていたそうだが、経験のない勝田は、古い学帽をかぶり、後年の一橋大学法文学部長を髣髴させる弁舌であったので、誰もが上級生と間違えた。また、彼は針葉樹会に会費制度を導入したマネージャーだった。5人は夢中で登っていただけのだが、下克上の風を吹かせたように、何人かいた2年生がいなくなつた。今も名簿上29年卒は空欄だ。

昭和26年7月の夏合宿は、新人4人を含む10人が剣沢生活から立山・五色ヶ原・針ノ木峠を経て大町に至るものだった。食料は配給制度下、先発隊が現地調達した米と馬鈴薯を称名の滝下にデポし、追分小屋に一泊して、剣沢に入った。

翌朝、須山・奥野・石原の3人にデポした食料の荷揚げが命じられた。この荷揚げ行は部生活の中でも最も厳しいものの一つになったので、軍隊帰りの小泉リーダーの新兵いじめを恨んだものだった。

しかし、須山は理論も山歩きも最強だったし、奥野は山岳部の奥野綱重大先輩（針葉樹第一号発行当時すでにOB）の二代目御曹司で、父親譲りのヒッコリーのスキーを始め、服装も秩父宮様なみのうえ、富山高出身らしく、「剣・立山のことは俺に任せろ」と言っただけで、憚るところが無かつたから当然の人選だった

かも知れない。剣沢では、源次郎尾根は登つたが八ツ峯には行かなかつた。まだ岩登りはやらない合宿だった。

昭和26年12月は、戦後初の雪山合宿として、小泉リーダー以下9名が遠見尾根から五竜岳に向かつた。ところが、前号で中村さんが詳述したように大遠見山の先に前進テントを設営した先発隊が「テントが燃えた」とのこと。遠見小屋に戻つてきた。翌朝、須山・石原の2人はアタックパーティの小泉・横山両先輩に付いて前進テントに向かつた。

テントを仮縫いし、アルコール・バーナーで炊事するまでは順調だった。ところが、残置食料がない。餅15個を持参した私は「15個ずつと言つたのに、どうして60個持つて来なかつたか」と叱られた。翌朝アタックパーティを送り出した須山・石原は絶食した。

昼頃、白川が一人で登つてきた。彼は楽しいな語り口で何時も周囲に笑いの渦を巻き起こすので、部生活や合宿に欠かすことの出来ない貴重なキャラクターだった。しかし、この時はやはり、寒さに震えながら餓鬼道に落ちた2人に自分の水と弁当を置いて、言葉もなく帰つていった。

午後、五竜登頂から帰つてきたアタックパーティはテントの撤収を命じて通過していった。穴だらけの凍つたテントは氷の団子



前列左から 須山・小泉・石原、後列左から 中村・南・渡辺・奥野・白川。昭和26年夏合宿で。

のようで捨てたかったが、須山が頑張って下ろした。この冬合宿は、問題はあったが雪山への指針を戦後の山岳部に残した。

昭和27年度（針葉樹11号の前夜）

この年の記録は、時間的には11号に所載可能だったが、他人様にも先輩方にもとても報告出来る内容ではないので割愛した。しかし、語り部が消滅しそうな懸念もあるので、小島会報幹事の勤めによって16年断層の最後を埋めておく。

7月の澗沢合宿は、新人11人（前号の写真にプラス吉田・福田、今のオーション会）が大挙して加わり、中村リーダー以下総勢25人になったのに、焼け残りのウインパー天幕一張りしかない。出発前の寄付集めが山登り以上に大変だった。

澗沢生活後、渋谷・石原・甘利・佐藤は縦走隊と別れて奥又白の池に幕営。この岩登りのミニ合宿で、甘利という登攀隊長が一橋に出現した。

甘利は前穂四峰の明大ルートに向かったが、「明大さんに申し訳ないから」という私の申し出をきかず、ノーザイルで登り切ってしまった。

次の四峰正面右端の甲南ルートは、正面壁から続く急なスラブが一連のハング帯を形成しているが、私が苦勞して掛けたアプミを使わずに、彼はバランスで上がってきた。

甘利にとっては、留年して正面壁の冬季初登に賭ける端緒になったようだ。

昭和28年3月に向けて、前年度の遠見尾根冬合宿に続く雪山を、西穂高から奥穂高への縦走と決めて秋に西穂小屋に荷揚げをした。甘利との偵察行では、「豚のケツの鎖が使えれば楽勝だ」と考えた。

最後の旧制と最初の新制4年部員は同時卒

業し、3年生は欠員なので、2年生の須山・勝田・石原と冬の八ヶ岳で夏のテントを張った」と豪語する1年生の甘利の4人のみがメンパーだった。戦前のウインパーが一張りしか残っていないというのが表面上の理由だったが、あっても人数を揃える力はなかったのだ。

行動の初日。4人はスキーで善六沢の左岸の雪を切って登って行った。沢筋から離れるにつれて熊笹が出てきたので、トップの甘利が「雪崩れるかな?」と言ってから間もなく雪が動きだし二番手の勝田が視界から消え、次の須山は灌木に挟まれて止まった。底雪崩の跡を200メートルほど下った時、勝田がデブリの間に首だけ出しているのを見つけた。その首が「オイ 早く来い」と喋った。狂喜の瞬間だった。

対岸の上って、太陽が飛驒側に消えるまで耐寒と反省の長い時間を過ごしたが、出発前の大塚・山田両先輩の忠告が身に沁みた。「去年は、北岳に行きたいとのことだったが五竜岳にして良かっただろう。いわんや今年は下級生ばかりで奥穂への縦走などはもってのほかだ。岳沢生活にしなさい、それで充分楽しいはずだ。不満げな私に「楽しいよ」と言ってくれた大塚さんの温顔が未だに忘れられない。

翌日からワカンで西穂小屋の荷を下ろし岳沢に移った。ところが、唯一戦前から残ったラジウスが点火しない。登るため生きるために缶詰の空き缶に灯油を入れて火を点けたら鼻の穴まで黒くなり、ひとつこーいもない雪原にアフリカ系人種が4人出現し、ジャンダルムと前穂高に登った。

翌年3月、これは針葉樹11号に載っているが、岳沢を9人で再訪した。コブ尾根への甘利・佐藤・吉田、壘岩尾根の松尾など2年生が活躍し、装備も一新され、楽しい合宿になった。なにかと生活が困難だったこの時代に毎年大きな額の寄付を頂戴した戦前からの諸先輩に改めて御礼を申し上げたい。

昔の山と今

もしも昭和30年前後に、若い小谷部・森川先輩が居られたら、鮮烈な連続初登攀を見せてくれたかも知れない。針葉樹11号に寄せられた大塚先輩の文中でも「山岳部では、より困難を求め一人一人の充実が大事で、集団的な合宿やポラーメソッド以外にないもののように考える必要はない」(56頁)と戦前の先輩方の考え方が示されている。

では昭和20年代末からの合宿中心の山岳部は何だったのか？

旧制の6年間に比べて新制4年は数字以上に短かった。また新入生に山の経験者を期待することは難しかった。

「出発だ。〇〇はどうした？」

「お土産屋に行っています」

「……………」

この〇〇君に、2年後、雪と岩のトップに立つ事が要求されるのだ。

さらに大きな時代背景として、巷には趣味の会も娯楽も乏しく、学内にスキー部もワングルも無い時代には他の運動部が羨むほど山岳部は膨らんだ。大学山岳部を基盤にする日本山岳会でも、昭和30年代を中心にしたこの時期を大学山岳部の「大規模集団時代」と称している。合宿は必然ではなく、結果であった。

その時代も半世紀前の昔の山になった。コンスタンチン君が居なくなった平成20年に、佐藤力OBのお陰で貴重な数人の新人が得られたが、歓迎山行の後の話が聞こえてこない。八ヶ岳の自分の山荘に川名さんの助けも借りて誘ったが、音信不通だ。

今の「山」は何だろう？「温故知新」というわけにはいかないものだろうか。

東南チベット・四川踏査行 / 2008年10月11日
ゴルジュの国の未踏峰から大渡河の
知られざる山々へ

中村 保 (昭31年卒)

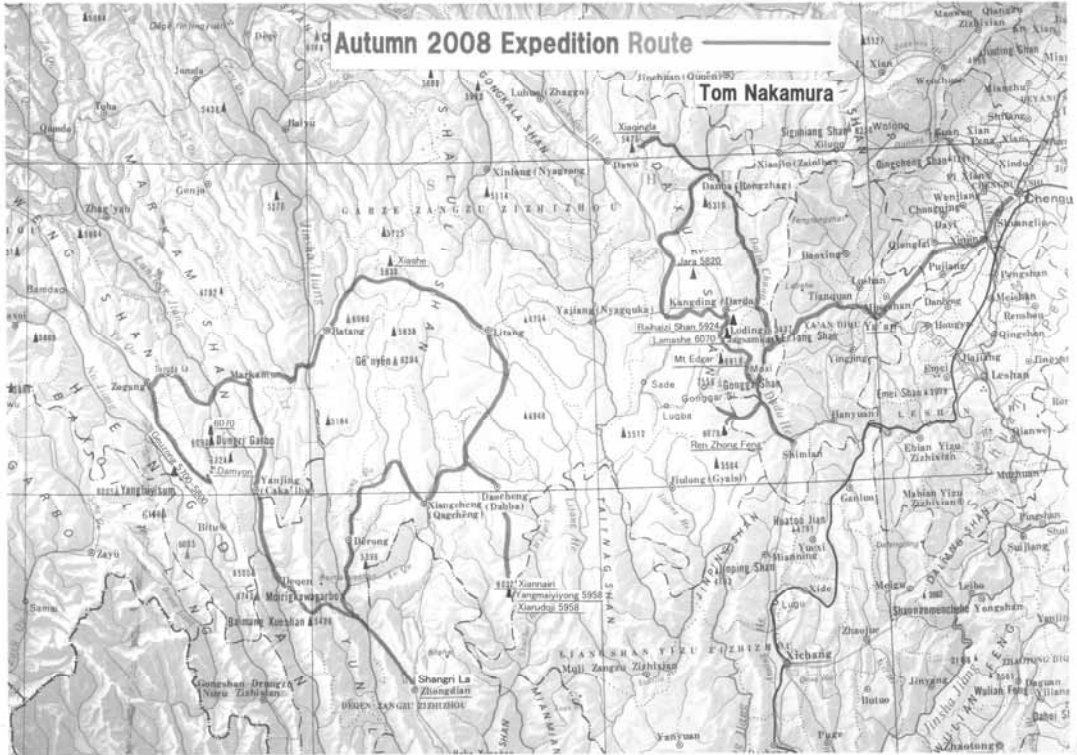
2009年秋の山旅でも、中村は「晴男」であることが立証された。「トムの写真はみな青空だ。いつもそんなに天気がいいのか」とよく欧米の登山家に聞かれ、「私は *more fine weather* だ」と答えてきた。オーストラリア人の著名な南極の専門家、Darien Gideaさんからこんなメールをもらったことがある。
"Dear Tom, your camera always produces blue sky. Please let me use your camera when I visit China next time."

踏査の目的

ステーション 東南チベット・ゴルジュの国

動日夏波 ドゥンリョウカハ 6090m踏査

この「ピーク」の存在は中国の「青藏高原山峰図(1:2,500,000)」にのみ示されているが、写真はないし、踏査の情報もない。まず動日夏



6079m Pk S face south of Minya Konka



Dungrig Garpo 6090m
W face from Hong Qu 6079m Pk E
face south of Minya Konka

波山塊の地理的な整理が必要である。深いゴルジュの国 (Deep Gorge Country) の核心部であるメコン川 (瀾滄江 Lancang Jiang) とサルウィン川 (怒江 Nu Jiang) の分水嶺をなす南北に連なる長大な怒山 (Nu Shan) 山系は南から順に左記の3つの大きな山塊が連なる。

- (1) 梅里雪山 (Meili Xueshan) 山塊
 - (2) 大米勇 (Damyon 女神の山) 山塊
 - (3) 動日夏波 (Dungril Garpo) 山塊
- 有名になった梅里雪山山塊を含め怒山山系の6000m峰は全て未踏である。

大米勇山塊は3つの6000m峰と多くの5800~5900mの峨々たる岩峰群を擁する巨大な山塊である。1922年にプラント・ハンターのキングドン・ウォードが塩井 (Yanling or Yakato) から偵察した後、5年前の夏にヒマラヤの花の写真家・吉田外司夫さんが、2007年11月に横断山脈研究会の村の隊が西側のサルウィン川支流・玉曲 (Yongqu) に入り南面から探査しただけである。東側、すなわちメコン川からのアクセスのルートは見つからない。登山の目的でアクセスした。パーティーはない。降雪量が多く氷河が発達した梅里雪山に比べ、大米勇山塊、動日夏波山塊はわずかに小さな氷河があるだけである。

動日夏波山塊も3つの6000m峰と多くの特徴ある5700~5900mの岩峰を擁する。情報がまったく無いこの山塊の探査を2008年秋の第1ステージの主なテーマとした。山塊主峰の動日夏波6090mは東経98度20分、北緯29度17分に位置する。チベット族の村人によると「動日」は「ほら貝製のホルン」を意味する。当初の計画では北側からのアプローチを考えていたが、すでに初冬になり数日前に東チベットに降った大雪のため、越えなければならぬ5300~5400mの峠は雪に閉ざされていた。やむなく西側に転進した。玉曲の支流・紅曲 (Hongqu) を通り、源頭近くまで雪中のキヤラパンをして動日夏波西面に外国人として初めて接近した。同時にメコン・玉曲分水嶺のピークの偵察もできた。主峰の北の6070m峰は残念ながらその西面の姿を捉えることはできなかった。

ステージ2 四川省大渡河へ、ミニヤ・コンカの南 幻の山6079m峰の探査

1996年に出版した拙著『ヒマラヤの東』(山と深谷社)のなかで四川省の気になる未踏峰としてミニヤ・コンカの南の6079m峰を挙げた。四川省のなかで稲城県の貢嘎雪山の仙熱日 (Xianari) 6032mや巴塘県の

央莫龍 (Yangmolong) 6060mとともにな少ない未踏の6000m峰であり、早晚注目を浴びるだろうと12年前に書いた。しかし、数年前にアメリカン・アルパイン・ジャーナル編集長の John Hallin IIIと著名なアメリカの冒険家、Mark Jenkinsが試みようとしたが実現しなかった。「青蔵高原山峰図(1:2,500,000)」に標高のみ示されているが、写真は無く未だに知られざる幻の山であった。

このピークは、ミニヤ・コンカ一周ルートを西側から南に流れ、西から東に大渡河 (Dadu He 揚子江の支流) に注ぐ田湾河 (Tianwan He) の南に位置する。東経101度25分、北緯29度18分にある。土地の人は名前をつけていないので、四川登山協会は、田湾河の北にある人造湖の名称「人中海 (Ren Zhong Hai)」をうつて仮に人中峰 (Ren Zhong Feng) としている。田湾河を遡っていくとミニヤ・コンカ西面の貢嘎寺に至る。田湾河は随所で水力発電所が建設されており、眺望が利かない深い峡谷である。

四川では6079m峰の探査ともう一つの目的を設定した。横断山脈研究会の吉村千春さんが2009年に計画している大雪山系北部、大渡河流域の「美人谷」と石塔で名高い丹巴 (Danba) の北西70kmの党嶺 (Dang Ling) における夏羌拉 (Xiaqianga) 5470Eの偵察

である。東面は円錐形の岩の険しいピラミダ
ルなピークである。手強そつであるが、手前
の美しい湖と森林のコントラストは美しい景
観である。観光開発が緒についたところであ
る。

終わりにメンバーのことに触れておきた
い。人との触れ合いが大事である。踏査行の



Xiaqianla 5470m E face Daxue Shan northwest of Dangba

成功は現地のガイドと通訳に負うところが大
きい。ステージ1では、ガイドの陳小紅さん
がいつものようによく世話をしてくれた。彼
との付き合いは1996年に梅里雪山巡礼路
一周が最初で、以後何度も東南チベットのイ
ラワジ川源流、崗日嘎布、宣教師の道など、
彼も知らなかった未踏域に同行してもらった。
私が彼を育てたといっても過言ではない

し、本人もそう自覚している。いま
ではツアー会社の社長に成長し、徳
欽から香格里拉に移って商売繁盛し
ている。

陳さんが案内してきたスイスの登
山ガイドが今回の小生のヨーロッパ
行きを知り、彼のところ（チュー
リヒ近郊）に立ち寄ってくれと頼ま
れたのでお世話になることにした。
彼は名の通ったガイド、スイス山岳
会のジャーナルに拙著『Die Alpen
Tibets』の丁寧な書評を載せてくれ
た。「A world is small」である。

通訳（英語 中国語）の金さんも
大いに助けになってくれた。河北省
生まれ、田舎の高校で英語の勉強を
し、武漢のカレッジで英語の勉強を
し、上海にでて働いてきた31歳の
美人である。英語は基礎がしっかり

しており、勉強家で理解力・気配りは素晴ら
しい。彼女の正確な通訳が奥地での交渉をス
ムーズにしてくれた。現在は武漢の英語学校
で先生をしている。

ステージ2では、成都の「四川大地探検公
司」社長の張継訳さんがガイド兼ドライバ
を務めてくれた。張さんとの付き合いは19年
になる。1990年、香港に赴任したばかり
の頃、仕事で重慶に出かけたあと、成都から
四姑娘山のトツレキングに行ったときに付い
てくれたのが彼である。当時は四川登山協会
の一介のガイドだったが、登山と河下りのツ
アー会社を興し成功している。

共同経営者の弟の張少宏は日本に留学した
経験もあり日本人客の世話もしている。少宏
は昨年、チヨモランマ登山のカメラマンとし
て参加、北京で出版された『チヨモランマに
輝くオリンピック聖火』という立派な写真集
の編集に携わった。張兄弟はアメリカと英国
でよく知られており、アラスカのクライミン
グの草分けであるフレッド・ベッキー、英国
アルパインクラブの副会長マーチン・スコッ
トとは特に親しい。私は英国に行くたびにロ
ンドンのマーチンの家に泊まって世話になっ
ている。ここでも「A world is small」である。
（編集部注「詳しい行程表は、一橋山岳会のサ
イトに掲載してあります」）

キリマンジャロ紀行

佐藤恭・中川滋夫・遠藤晶土・
蛭川隆夫・小野肇・小島和人

出発まで

蛭川 隆夫（昭39年卒）

人生はひよんなことから

それは、遡ると2007年3月、ある酒席での小野さんの一言「キリマンジャロ行きたいですね」から始まった。そのときは小野さんの心意気を講える応答をしたのだが、5月の「昼から会」で岳友Kが仰天発言。「蛭さんが（小野さんと）キリマンジャロに行くというので、わしもそうすることにした」。「えっ、自分に行くとは言わなかったぞ」とその場では否定したが、帰宅して「自分の人生コースは案外こんなことで決まってきたな」と考えた。そうしたら「行きたい！」という気持ちも沸々と湧いてきて、幹事役を買って出た。7月になって、手配ツアー（気のあった者が希望の日程で行動する旅）とする。DoDoWorld社（ナイロビの旅行会社）を使う、時期は2008年12月とするなどの基本路線を決めた。

旅行会社の社員でもないのに

9月から、針葉樹会内外の隊員募集とともに、資料探しと情報集めを開始。佐藤さんがアメリカ駐在時代に買求めた何冊ものガイドブックが大変に役立った。もう一つ有効だったのがインターネット。今回の旅は、メールも含めてインターネットがなければ間違いなく実現しなかった。

幹事としては、一番困ったのが航空券。当初予定していた呼び寄せチケットが、ケニアの法改正で不許可となったのだ。日本で自分たちで手配せざるを得なくなったわけだが、格安チケットとはなんぞや、その種類はなど、基礎知識の勉強から始めることになった。くわえて、ビザ取得、イエロー・カード（黄熱ワクチン接種の証明書）取得、旅行保険、健康診断……。さらに、現地の土産物屋の所在、飲用水ボトルの調達方法などに至るまで、調査課題は次々と出てきた。ギブアップして旅行会社の主催ツアーに切り換えようかとも考えたが、手作りの旅の魅力を捨てきれず頑張ることにした。

キックオフ

年が変わって2008年の4月。第一次会宿で富士西麓に集合。長者ヶ岳/天子ヶ岳を往復後、宿でキックオフ・ミーティング。最

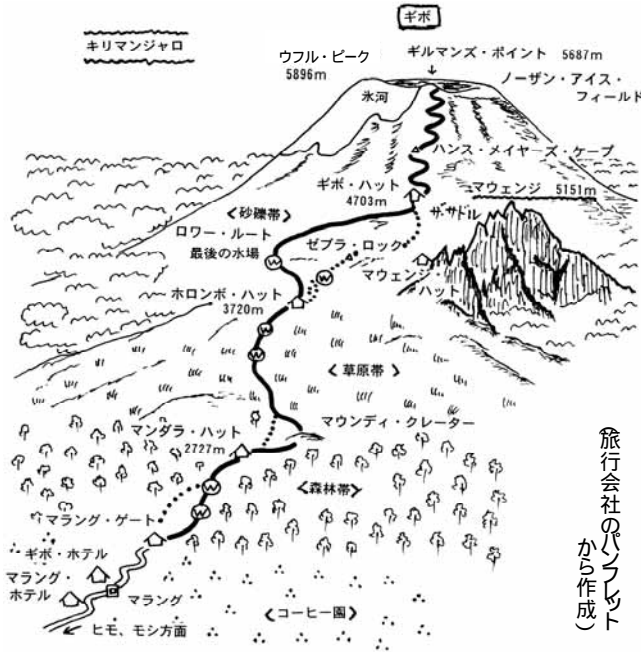
大のテーマであるチーフ・リーダーは、中川さんが引きつけてくださった。あわせて個人装備（佐藤）・食糧（小野）・医療（蛭川）・会計（小島）・記録（遠藤）と各係も決まった。もう一つの懸案は、旅行時期。11月の大雨期を挟んで10月から翌年の2月まで、各人の都合や希望はばらばらだったが、そこは就任したばかりのチーフ・リーダーの裁断で、10月13日の満月の日に登頂と決まった（真夜中に最終小屋を出るので、満月の月明かりをあてにできる）。

松野ドクター

第二次の合宿は、7月の山形県の寒河江と仙台。まず、松野病院長（小野さんの友人のJAC会員）ご夫妻のご案内で障子ヶ岳登山。朝日岳を真南方向に眺める位置にある山だ。松野ドクターは、登山中それとなく我々のフィジカル・チェックを行っていたらしい（下山後「合格ですね」と笑っていた）。仙台の病院に移動して健康健診。精密検査要すとなったのが私を含めて3人。松野ドクターには、車の運転から、健診の差配、パルスオキシメーターの入手、ダイアモックスや各種救急薬の用意に至るまで、大変にお世話になった。

低酸素トレーニング

第三次の(準)合宿は、8月上旬の富士山。佐藤・遠藤・小島さんに加えて、富士山にまだ登っていない妻の紀巳子と長男のお嫁さんというメンバー。言うまでもなく高度順化のためだが、それには往復するだけでなく頂上で一泊するのがより効果的。出発間近の9月の方が望ましいがその頃は小屋が閉まっているので、8月とした。八合目で、不調の紀巳子が前進を断念。7月末から体調不良の私も



付添を言い訳として下山

9月。やり損ねた富士山の再チャレンジは諦め、お金はかかるがMURABAH CAMPのトレーニング回数を増やすことにした。最初の高所テストでは、動脈の硬さは67歳男性の標準範囲と出て安心し、肺活量は54歳なみとの判定に内心得意になり、閉眼片脚立ち(パランス)の81歳相当にはがっかりきた。昼間の歩行器トレーニングは、3000m台から6000mまで高度を上げながら累計8時間。夜間睡眠は2回(3800mと5500m)。呼吸法(腹式呼吸)の講習は参考になった。また、高所では眠れなくてもあせることはない(むしろ起きている方がいい)と言われたのは安心した。総じて、低酸素室トレーニングは効果があったと思う。

最後に(高崎・本間・竹中3氏に国内緊急連絡窓口を引き受けていただくなど)緊急連絡網を整備して、10月6日の出国日を迎えた。

登頂報告

遠藤 晶土(昭37年卒)

10月6日 羽田から関空へ。

18時30分、羽田空港にキリマンジャロ山行隊6名が集合。メンバーは、佐藤恭(昭33)、中川滋夫(昭36)、遠藤晶土(昭37)、蛭川隆夫(昭39)、小島和人(昭40)、小野肇(昭40)。(これからは皆様をイニシャルで表記しますので、Sは佐藤さん、Nは中川さんと読み替えてください。)

羽田から関空。そこでエミレーツ航空に乗り換え、ドバイ、さらにケニアの首都ナイロビへ。往路、復路の便の選択からチケットの手配まで、今回6名のパーティー幹事役を買って出たHがしてくれた。彼は、本来なら旅行会社に丸投げするこのツアーをほぼ独力で作り上げた。彼がこの半年間、現地と毎日、あるいは日に数度のメールをやりとりして立てたスケジュールは、単に経済性だけでなく、各人の我侷を吸収した、痒いところに手が届く、完璧なものだった。

10月7日 ドバイ経由でナイロビへ。

14時50分 ナイロビ着。乗換えが多いので、羽田で預けた荷物が出てこない場合を想定して、登山靴やら小型の酸素発生器など、

現地で購入または借用できない器具、薬品などは手荷物として機内に持ち込むという、周到な準備をしたのだが杞憂。預けた荷物はスムーズに出てくるし、入管・税関も、出迎への現地旅行会社の車に会うのも、問題なし。雑踏のナイロビ市内を抜けて、ホテルに送ってもらい、チエックインもそこに日本大使館の出迎えの車に乗る。このナイロビ如水会がアレンジされた経緯は、「橋畔随想」にKが簡明に記載している。

10月8日 ナイロビからタンザニアのモシへ。

5時 起床。6時 食事。7時 迎えのバスに乗り込み出発 22 1600m。

私はこのパーティーの記録係。記録係が無能なために命を失った登山の例は聞いたことがないので、皆は安心して私を任命し、私も安心して引き受ける。

昼、ケニアとタンザニアの国境を越える。各人が書類にチョコチョコと記入すれば、ここも問題なくケニア出国、タンザニア入国。

15時35分 モシのホテル着 32 810m

17時、ホテルからのブリーフィング。このホテルの宿泊客は、ほとんど明日からキリマンジャロを目指す。その客が中庭に集められる。「老」は我々6名のみ。残りの約40人は世界各国からの屈強な「若男女」。ホテルから

の一般的注意があつて、引き続き各パーティーに分かれ、チーフ・ガイドに紹介される。我々のチーフ・ガイドはウィルソン氏。57歳、登頂歴1000回というベテラン。Hの膨大な頭の中の資料にもその名が入っている由で大安心。19時30分、夕食。すぐ睡眠：とはいかない。SpO2測定。これもHが測定器（パルスオキシメーター）を持って各人の部屋へ。各人の「高所体調管理表」（SpO2測定表）も記録係の担当だが、測定器が不調になつて途中でウヤマムヤになりました。

10月9日 モシからマンダラ・ハットへ。

6時30分 朝食。8時 各人ホテルに置いていく荷物、山へ持っていく荷物に分け、チエックアウト。8時50分 迎えのバスで出発。

ホテル2階のテラスからキリマンジャロがよく見える。鶏鳴。絶え間ない小鳥の囀り。これは、Nが撮影したビデオの冒頭を飾る名場面だ。ビデオではSとNがキリマンジャロ登山ルートを論じる、落ち着いた会話を聞くこともできる。

9時50分 マラング・ゲート 1500m
20。11時 出発。

ゲートといつても門戸が閉ざされているわけではない。申し込んであるガイド4名、ポーター12名、コック、ウェイター数名の一大サ

ポーター隊がここに集まる。ポーター達の荷物分けなどを待つ時間、ゲート事務所前の売店を覗く。日本の博物館の売店と同じく、少し高いかもしれないがここでしか買えないキリマンジャロ・グッズがある。

サブザックには、水と支給されたランチ・ボックス程度しか入っていない。軽々と、ボレボレでもはや日本語になつたような「ゆっくり」の意）歩き出す。

「何故山に登るのか？」「そこにあるからだ」この有名な問答も、最近はこれで終わらない。「何故、この山はここに「ある」のだ？」の間に答えねばならない。キリマンジャロ山は複成火山。750万年前に噴火。地球の年齢45億年に比較するとつい最近だが、人類の歴史に比すると大昔だ。アフリカ人もこの大噴火の被害を受けなかったのは、ご同慶の至りだ。

15時 マンダラ・ハット着 2730m 20。

ロツジは、1部屋（4〜6人）が背中合わせで1棟。約10棟が各宿泊地にある。ポーター達は、テント。食堂、炊事小屋、男女別トイレは、別棟。したがって登山客はすべて予約制。ガイド、ポーターなどの同行は、予約と同時に義務付けられている。富士山の小屋の超過密に比べ優雅な山行きが楽しめるが、富士山その他日本の山にこのような定員

制を強いたら、大衆国家の日本人は黙ってられるだろうか？ 大混雑の日本の山も貧富の差がない「日本の良さ」とも考ええるのだが。

このキリマンジャロ国立公園の小史¹ 1961年タンザニア独立、1973年2700m以上を国立公園に指定、ノルウェーの援助でマンダラ・ハット、ホロンボ・ハット建設、1977年オープン、タンザニアの外貨獲得への貢献度は……調べていません。

16時〜17時 マウンデイ・クレーター往復。17時30分 夕食。

夕食時に3名のアシスタント・ガイドがウィルソン・チーフから紹介される。この儀式は友好のためだけではない。「契約」どおりの人数がたしかに雇われているかの我々の側からの確認だと、Nが言う。治にいて乱を忘れず。外国慣れしているNリーダーは、山以外でも、まことに頼りになる。

10月10日 マンダラ・ハットからホロンボ・ハットへ。

6時 起床 外気10。7時30分 出発
12時 ランチ・スペース 3280m
20。14時20分 ホロンボ・ハット着 3780m 19。

ランチは、テーブルとベンチと、少し離れてトイレが備え付けてあるランチ・スペース

でとるのだ。今日のランチ・スペースには、小動物の30センチほどの頭骸骨が転がっていた。ウィルソンに聞くとオオネズミだという。ガイドはなんでも知っていなければならぬ。このパーティーには、山の植物、鳥の権威Sがいる。Sの高度な質問に、ガイドはかなりの確に答えていたようだ。曰く、エリカ、マウワイ、マジヤン、シユワロン。ちよつと珍しいのがセネシオ、アンクラス。鳥の名もいろいろ。ところが、Sが初めて見たという驚の名を記録した私のノートには「ナントカイーグル」。ゴメンナサイ。

夕食時、各人に記録用の 今日の一語 を依頼した。H「探していた女性のポーターがいた！」、N「将来はここはバスが通るだろう」など。

10月11日 ゼブラ・ロック往復 ホロンボ・ハット連泊。

5時 起床 2。8時40分 出発
10。10時10分 ゼブラ・ロック 3835m 12。12時 ホロンボ・ハット着

背中には水だけ。緩い登り。高度順化のための散策。昨日来のOのトップのポレポレ振りがガイドを含む全員から絶賛を浴びる。

こんな広々としたゆったり道でもトップ以下整然と一列になって歩くチームワーク。同

じ釜の飯を食べた山岳部OBとの山行きの良さをしみじみと感じる時だ。

キリマンジャロがいよいよ近い。1889年、ドイツ人マイヤーが初登攀。彼が頂上を目指した理由はなんなのか？ 日本の山が登られるのは、富士に始まり、槍、剣など宗教的理由が多い。それに対し、西欧の登山の動機は？ キリマンジャロは、不規則な国境線の引き方で旧ドイツ領のタンザニア領になっている。これがマイヤーがドイツ人だったためだとしたら、俄然彼の登頂の目的はキナ臭くなってくるのだが。

いつのまにか、夕食の献立も記録の対象になった。今夜は、スパゲッティ、ミートパイ、野菜の煮込み、パッションフルーツ、オレンジ。毎食、各料理をSが厳かに判定していく。ランチは、excellent、good、fair、poor、そしてnot acceptable。エクセレントを買ったのはスパゲッティ。今日の一語 でOが曰く「食事が細いNが手を出したほど今日のスパはおいしかった。Hは3杯たべた！」

Oは食料担当。Nを氣遣って次の日は日本からの「にゅうめん」を炊事場に持参し、コックと一緒に作って食膳に供した。Nだけでなく、我々も食が進んだ。

10月12日 ホロンボ・ハットからキボ・ハット

トへ。

6時 起床 マイナス2。7時30分 出発。9時10分 休憩 3815m。12時30分 ランチ。14時 キボ・ハット着 4750m
8。17時 夕食 9。

最初にキリマンジャロが姿を現したときから、左の肩の蝶々型の雪深が目を惹く。左の肩は……アレッ、こっちは南面だよ。あっ、そうか、ここは、南半球。南北が逆なのだ。だから、夜中空を見ても馴染みの星座がない。北極星がない南半球はどのように「南緯」を決めたのだろうか？

キボ・ハット間近のささやかな急登に息が切れる。いよいよ明日は登頂かと、緊張する。

今日の一言集。S「富士ならここは5合目。ギルマンが9合目。そこから大変」。N「キナル以来の4800mで、なんとなく高度の影響を感じた」。H「前日までは写真を撮っても簡単に列に戻れたが今日は苦しかった。Sのゆるぎない足取りに改めてSの偉大さを感じた」。K「長かったけど、なんとなくいちゃった」。O「カメラを落とした。明日拾って帰る」。

Sの「偉大さ」は、Hのみならず全員が感じ入っている。言葉を交わす外人達にKが「He is the oldest but the strongest」と紹介し、76歳とSの歳を伝える。皆「incredible」と

絶句する。ガイドも一目も二目もおき、たびたび荷物を担ごうと申し出るのだが、Sは相手にしない。

今日の夕食は、ジャガイモのスープ。Oの評価「good」。

10月13日 キボ・ハットからギルマンズ・ポイント。さらにホロンボ・ハットへ。

前夜22時 起床。23時 出発 マイナス10。0時〜0時30分 酸素発生器使用。2時40分 ハンス・メイヤーズ・ケープ 5150m マイナス10。6時〜6時30分 ギルマンズ・ポイント 5685m 0。8時〜10時 キボ・ハット 5。14時 ホロンボ・ハット着。

いよいよ登頂日。この、たった一日のために、我々は1年以上の準備を重ねてきたのだ。岩も雪もないキリマンジャロは、夏の富士と同じく、登っても自慢できる山ではないだろう。しかし、キリマンジャロ山には夏の富士では経験できない「高さ」と「寒さ」がある。6000mの「高さ」は、これもHが周到に手配したMURRA BARR CAMPの低酸素トレーニング・ルームにたびたび通つことで我々の多くは体験できた。これは心と身体の準備に大いに役立った。しかし、ガイドブックにあるマイナス20の頂上の温度は未経

験だ。起床と同時に、持参の衣類をあれこれ考えずすべて着込む。下山後、この日の服装を全員に書き出してもらった。上半身7枚、下半身5枚の重ね着、靴下2枚、手袋2枚。ここいらが標準だろう。それに皆が付け加えたのがホカロンだった。私も当然持参した。ところが、ホカロンのビニール袋が破けない。焦る。「ホカロンが出ないヨ」。70歳の後輩が71歳の先輩Nに泣きつく。Nは、黙って受け取り、簡単に開けて、黙って返してくれた。助かったー！ 用意の両面テープで下着のあちこちに貼り付け、手袋の中にも小型を入れ準備完了。

外は見事な満月。今日13日は満月と知って、リーダーは登頂日に選んだのだ。しかし、満月の顔を見たのはこの時だけだった。あとはひたすら下を見て一歩一歩、歩くだけ。月を振り仰ぐエネルギーも無くなるのだ。

例によって、急坂ではSの後につく。ところが、Sの足元がいつもと違い珍しく覚束ない。1時間も歩いた後、Sは倒れこむ。持参の小型の酸素発生器でSに酸素を吸ってもらう。5〜6分で、Sは元気に立ち上がる。しかし、そこからがSのみことなところだ。「お前達に迷惑をかけたくない。俺はここから下りる」と我々に言い渡し、いつもと変わらぬ、しっかりした足取りで下りていった。



富士山とほぼ同じ標高のホロンボ・ハットにて
(背景はキリマンジャロ)。

また、1時間後、今度はOの足が出なくなつた。Oの場合は、原因がはっきりしている。北海道に住む彼の場合、代々木のMINATA BASE CAMPに思ふ通りに通えなかったのだ。Oはここ数年この6人の中では一番ハードな山をこなしている山の現役だが、高さの影響はまた別の次元なのだろう。

ここで、H、K、Eのポレポレ組と、Oと彼に付き添うNの「もつとポレポレ組」に別れ、登頂再開。ハンス・メイヤーズ・ケープで一休み。数時間後から出発したパーティー

が次々に追い抜いていく。いつの間にか、我々の荷物はウィルソンとアシスタント・ガイドの背中だ。

6時、ようやく稜線。そこがギルマンズ・ポイント。5685m。マイナス10。今回の山行きは天気に恵まれた。日の出が見える。風もない。気温は、案ずることもなくマイナス10。

ウィルソンがゆっくり話し始める。「あなた方はかなり疲れている。それに高齢だ。時間も予定より遅れている。あなた方3人に対し、残ったガイドは2人だ。これから最高点のウフル・ピークを往復する間に何か起きたら、対応できなくなる。ここで引き返そう」。

あー、いいですね。私はここで充分。多少の余力があるHもKも素直に頷いて、あとは記念写真。直径900m、深さ50mの大きな火口内部の南面に残る氷河が美しい。時折ウフルまで完登したグループが帰ってくる。

勇躍、ゴロゴロのがれ場を下り始めると、Oを下山させてNがガイドを伴ってゆっくりと登ってきた。「なにっ？ 下りるの？」流石、リーダー、頂上を極めない登山にはなはだ意外そうだったが、学生時代と異なり叱咤激励して登らせるわけにはいかない。また、我々の下山も見届けねばならない立場だ。Nは、仕方なく、ウフルの単独登頂を諦めてギ

ルマンズの頂上を踏んでから、我々と一緒に駆け降りる。

富士の砂走り状の下りを一直線にキボ・ハット。途中でOと合流し、空身に等しい荷物でブラブラとホロンボ・ハットへ。あとのたった一つの仕事はOのカメラ探したが、これも見つかつて、無事ハット着。元気なSに迎えられる。

今夜がガイドやポーターと過す最後の夜。寒いからロツジの中でビールと柿の種でお別れパーティーを開く。キリマンジャロ登山客は、年間約4千人。ヨーロッパ、ニューヨークランドからが多い。日本人も団体で来る。圧巻は歌の交換。我々は当然「讃山讃」。先方も、日頃宴席で歌っているのだろう、掛け合いの入った彼らの歌を歌った。この歌はNがビデオに取っていてくれた。音は写真ではわからない。ビデオの独壇場だ。

10月14日 ホロンボ・ハットからマラング・ゲート經由モシへ。

6時30分 ホロンボ・ハット発。10時20分
11時10分 マラング・ハットで朝食。13時
30分 14時30分 マラング・ゲート。15時
30分 モシ。

バラバラになってノンビリと帰途。キリマンジャロが見えなくなっても、怪異な山容の

マウエンジーが見える。可哀そうに誰も登らぬ不人気な山だが。

これから登るグループとすれ違ふ。夫妻もいる。あの女性は「お嬢さん」か「奥さん」か。A型のHとB型のEは激論。いつものようにKが二人をなだめる。Kは、会計係としても、あの煩雑なホテルやポーターのチップの支払いをこまめにこなし、ツアー終了後は芸術的ともいえる各人別会計報告書を作成した。とても、B型とは思えない。

ゲートで迎えるバスに乗り、モシのホテル。一服後、中庭でウィルソン氏から、「10月13日6時にギルマンズ・ポイント5685mに70歳で（これは私の歳）登頂した」との国立公園の memo とガイドのサイン入り証明書が各自に厳かに授与された。帰国後、「コピーを親戚、知人、友人に手当たり次第配ったが、逆に私が貰ったら始末に困るだろう。」

最後の 今日の一言 から。「相変わらず食欲がなく入歯がガタガタになった」「天気が良くてよかったが、埃がすごかった」「ともかく、全員無事下山できて安心。」

私の 今日の一言 .. 山にも針葉樹会にも永いプランクがあったにも拘らず一緒に登頂させてくれたことを、先輩、後輩にただ感謝します。

そして、私の 明日への一言 .. 今は山に

も登っていないからと針葉樹会に縁遠くなっている方々、私のような者でも皆歓迎してくれました。是非、気軽に例会や懇親山行にご参加下さい。

この後、6名は揃ってサファリをキリマンジャロと同じくらい楽しみました。

夢破れたが

佐藤 恭（昭31年卒）

「同時代人のプロ・アスリート三浦雄一郎氏がエベレストなら、アマ登山者の自分は（身相応の？）キリマンジャロへ」というのがここ1年ほどの自分自身への応援の掛け声だった。十分な準備をしたつもりだった。しかし登頂は果たせなかった。何故か？ 自分にとって謎の数時間があった。

10月12日午後、早めの時間に4700mのキボ・ハットに入った時の体調は自覚としては何も問題はなく、引き続き数時間は登り続けられる感じだった。夕食も何とか腹に収まった。この先の急登は予習済み、少し頑張れば翌朝は山頂に立てると思っていた。しかし3、4時間の仮眠の後、夜半11時に小屋を出て登り始めると今まで経験したことがない

ほど苦しい呼吸が続いた。

MIRA BASE CAMP 低酸素室で習得した筈の6000mレベルでの呼吸法、1呼吸の間に2歩歩くというペースにどうしてもならない。1呼吸1歩がやっとだった。頭痛や吐き気などはないのだが兎に角苦しい。2ピッチ目の途中で膝から崩れ落ちた。予想外の、車に例えれば完全なガス欠状態だ。過去の山行で仲間の高山病を2度はかり経験している。こういう状態の時は兎に角早く下ることが唯一の対策で、さもないと危険だということも知っていた。

仲間と別れアシスタント・ガイドに付き添われて回れ右だ。キボ・ハットで冬装備を脱ぎ軽装で別のポーター一人と共に下り続けた。3700mのホロンボ・ハットに戻った時はまだ太陽が昇る前だった。体調はほぼ回復していたが自分の挑戦はあっけなく終わっていた。

12日の午後から夜半への数時間の体調の落差はなんだったのか？ 自分の体内の S_{O_2} が急落した結果と想像されるのだが、それを告げるべきパルスオキシメーターの電池切れでその計測は出来なかった。その急落があったとしてその原因は？ 仮眠の際、眠らずに深呼吸を続けるべきだったのか？ もっ

と早くからダイアモックスを服用すべきだったのか？ MIRA BASE CAMPで低酸素室で高度での睡眠体験を省略したツケなのか？ もし11時の時点の SpO_2 が危険水域だと知ることが出来たら、その時何か応急の打ち手はあったのだろうか？ やり直しを試せない今、これから複数の疑問への答は見つからないはまだ。

ということと自分の夢はあっさりと破れてしまったのだが、この山行は長い準備期間から終わりまで、山麓から望んだキリマンジャロの山容のように爽やかな思い出として残らさう。同行の仲間にも恵まれたこと、多数の人たちの応援にも感謝したい。旅の前夜、あの地ならではの貴重な体験も見聞もあった。失敗したからといって落ち込んだり後ろを振り向いたりするのはやめよう。少し気障な表現かもしれないがアンナブルナのエルゾークの言葉を借りれば「人生には他のキリマンジャロがある」に違いない。70歳代後半の次の新しい目標を見つけようと思う。

高山病にかかりました

小野 肇（昭40年卒）

3年前に日本百名山を完登し、次の目標はエベレストをこの目で見ることに、およびキリ

マンジャロの雪を見てあわよくばピークを踏むことであつた。2年前に三森さん（昭40）に声をかけて同期のクレイジー会でエベレスト街道をトレッキングしようと計画したが実現せず、三森さんが以前勤めていたヒマラヤ観光開発（株）のツアーに参加した。エベレストビューホテル（3880m）で宿泊し、翌日4200mのクンデ・ピークに登った。遠藤先輩（昭37）に同行いただき、心強かつた。高度障害もなく、ダイアモックスを服用しなくても大丈夫だった。パルスオキシメーターで計ったら SpO_2 が71だったことが唯一の気がかりだった。

キリマンジャロは、蛭川先輩（昭39）に声をかけ、紆余曲折あつて、昨年10月に針葉樹会員6名のパーティーで登った。

10日のホロンボ・ハット（3700m）あたりから、高山病の症状（頭が重い、吐き気がする、食欲減退）が出たら、あるいは SpO_2 が70前後になったらダイアモックスを服用しようと考えていた。計ったら SpO_2 が70だった。

11日は、高度に身体をならす予備日だった。 SpO_2 を計るつもりだったが、パルスオキシメーターが電池切れで計測不可能。調子もよかつたので、ダイアモックス服用を完全に忘れた。友人の松野医師は、「2500mあたり

から服用したらいいが、個人差があるので強制はしない」と言っていた。

12日、4700mのキボ・ハットに到着。自己の最高到達高度を更新。キボ・ハットで仮眠し、夜の11時に出発。その時はなんの異常もなかつたが、13日の2時過ぎに5000mを超えたあたりから急に身体がだるくなり、足が前に進まなくなり、意識が朦朧となりだした。一人残されてもがんばろうという意識がなく、ただただ眠かつた。その場で眠りたかつた。ガイドにザイルでつながれ、3歩歩んでは止まり、引張られてはまた歩む様だつた。日の出を見ても何の感激もなかつた。ザイルを提供いただいたリーダーの中川先輩（昭36）ありがとうございました。ピークを踏んで下山してきた遠藤さん、蛭川さん、小島さん（昭40）たちと合流し、下山することになった。下りだすと嘘のように意識が戻ってきた。

ダイアモックスを服用していたら大丈夫だったかどうかははっきりしないが、自分の高度順化能力に対する過信が最大の敗因であつた。登山後、松野医師からは「予防医学の見地からなんの副作用もないダイアモックスを飲むべきであつた」とアドバイスされた。ダイアモックスが残っているので、5000mを超えるピークに挑戦し、自己の最高到達高

度を更新しようと思見ている今日この頃である。

登山を終えて

小島 和人(昭40年卒)

十分準備に時間をかけて望んだキリマンジャロ登山であっても、終わってみるあつという間の出来事であったようにも思えるのだが、やはりずっしりとした感覚を体全体に残してくれた。

6000mに近い山で中川リーダー以外は、それこそ初体験であったから、キボハツトからの夜間、マイナス10度の中での急登はかなり緊張していたように思う。あの圧迫されるような感覚は忘れることがないのだろうと思いますし、3000mの高度に達してからずーと見えていた雪を頂くキリマンジャロのまさに雄姿は頭の中からはなれません。このような不思議な感覚は6人全員が感じたことで、下山後の数日間のサファリの間、サファリを楽しんでいたのではなくてこの余韻に身をゆだねていたのだと思います。

紙面の都合でこれ以上の「登山の後」は次号で中川リーダーの回想、遠藤さんのサファリ報告とともに少し書かせていただくことと計画しています。本号での報告は、今回の登山で知り合った駐ケニア日本大使若国滋雄氏が

ら新年に入って頂いたメールの一部を御紹介して終わらせていただきます。

「・・・(前略)・・・実はあの後既に二人の日本人がキリマンジャロ登山中に亡くなられています。やはり大変な山であることを認識しますと同時に、先輩御一行が周到な準備と慎重

高所医療一口メモ

(出所・・・山本正嘉「登山の運動生理学百科」など)
SpO₂・・・動脈血中の酸素飽和度(%)、つまり動脈中の酸素の量を示す。下界では97%前後だが、高度が上がると低下する。高度4000mでは80%を切るが、この値は下界の救急医療の基準ではICUでの治療が必要になるレベルである。

ダイアモックス・・・高山病の予防・治療薬。処方箋がないと購入できない。「大きくて速い」呼吸をすると、換気量が増加してSpO₂を高められるが、その反面、CO₂が過剰に体外に捨てられ、その結果体内の酸、アルカリのバランスが崩れ、過換気症候群(動悸・息切れ・めまい・痙攣・失神など)が現れる。この薬は、換気量をおだやかに増加させてCO₂の過剰喪失を防ぎながら、一方で酸素の取り込みを増やす。「深くゆっくりとした」呼吸(＝腹式呼吸)と同じ効果をもたらすのである。

パルスオキシメーター・・・SpO₂を計測・表示する、小型・軽量の器具。電池で駆動され、指先をクリップで挟むだけで簡単に計測できる。

MILURA BASE CAMP・・・(株)ミウラ・ドルフィンズが運営している常圧低酸素室。三浦豪太氏が所長。特殊フィルターで空気中の酸素を除去することで気

な行動をされたからこそ、皆さんお元気で帰還することが出来たのだ、さすが一橋山岳部であるなと誇りに感じた次第です・・・(後略) (編集部注「中川滋夫氏・小島和人氏の原稿は次号に掲載いたします」)

圧は変えずに高度6000mまでの低酸素状態を作りだす。低酸素トレーニングは、パルスオキシメーターで呼吸状態を確認しながら歩行運動・自転車運動を行うもので、高所での呼吸法の習得を同じような高度順化を目指す(高山病は眠っているときに起こりやすい、また悪化しやすい)。

酸素発生器・・・品名はハンディオキシゲンオーツィフォレスト。過炭酸ナトリウム、芒硝、水をプラスチック製の反応槽(73mm x 207mm, 110g)に入れて、化学反応によって酸素を発生させる器具。圧力容器ではないので航空機に持ち込める。

医療係の反省・・・最近のトレッキング・ツアーでは、ツアー会社の添乗員がダイアモックス、パルスオキシメーター、酸素発生器を携行するのが常識になりつつあるようだ。我々もこれらを共同装備とした。しかし、パルスオキシメーターは、肝心の時に役立たなかった。ホロンボ・ハットの2日目に電池切れとなったのだが、なんと予備の電池を携行し忘れていたのである。致命的な失態だったと医療係として反省している。(蛭川 記)

雪山讃歌（雪山再開）

金子 晴彦（昭46年卒）

胸までもぐる雪をかき分け、突風に吹き飛ばされ、寒さに頬を凍らせ、テントの除雪で夜も寝られない雪山。

昨年末仙丈に出かける前の晩、女房が「どうしてそんなところに行きたいんでしょね？」と心底不思議そうに呟いた。こちらは何も突然行き始めたわけではない、もう何十回も出かけて来たのだが改めてそう聞かれた。なぜなどと思ったことは無い。翌朝5時半、つれあいのギャップの深さに嘩然としながら新宿の高速バス乗り場に向かった。

1990年以来ベルギー、香港、大阪、北京とさすらい、冬山というものには縁遠くなった。地の利を生かしてアルプス、ネパール、ブータン、チベットなどのトレッキングには出かけて名峰を眺めたが所詮は長距離ドライブ+わずかなハイキングということでも欲求不満で終わった。

2005年春、東京に戻り、ようやく雪山

再開のチャンスは訪れた。しかし、長いプランクのおかげでどこから再開すべきか決まらない。針葉樹会のかつての若手は山スキーとかで年寄りには相手にしてもらえない。

香港での山仲間と相談すると東北の山が良いと言われ、その年末、3人で安達太良山に出かけた。庄内の鉄橋でJRの列車が脱線したほどの強風が吹いた日で、バス停からくろがね鉱泉に行くだけで体はすっかり凍り付いてしまった。小屋のストープと川ぞいの思いきり熱い温泉が心底嬉しかった。翌日猛吹雪の中を頂上岩峰の下まで辿り着いたがそれ以上は登れなかった。帰途はしばしばルートを見失いコンパス頼りにようやく小屋に戻った。冬山はさすがだった。

翌2006年2月、ちょっとアップグレードということで、その仲間に加え高校時代の山岳部の同期生に声がけて八ヶ岳の赤岳に向かった。硫黄岳で雪崩があり大学生が遭難、鉱泉のテント場は騒然としていた。それ以上にこんなにも思うほど冬山登山者がいた。翌日は強風、快晴。顔を防寒する準備をしていなかったため頬が凍傷で真っ黒になり、眼は雪盲でゴミが入ったような痛みを襲われた。登頂はしたものの準備不足を痛感した。

5月には4人で会津駒ヶ岳に出かけた。浅草から電車で会津高原駅に直行し、バスで全

くの秘境と想っていた松枝岐に出るというアブローチの便利さにまず驚いた。そして三岩岳までの急な登りとその後のゆるやかに波打つ稜線といった東北の山特有のリズムがすっかり気に入った。生活用具一式を背負って稜線を歩く充実感も久しぶりだった。

このあたりから常連4人の間で雪のある時だけパーティーを組んで登るという基本方針が固まり「北義経会」と名付けた。義経北行伝説に従いあまり出かけたことのない東北の山へ、しかもできれば冬に向かおうという意気込みだ。全員2008年で還暦だ。

しかし、その年の年末は北ならぬ西の甲斐駒に向かった。事前の11月に西牟田ならびにご息と偵察をした。五丈の小屋は雪の重みでかしいでひし形になり、侵入禁止となっていたが、立派なパイオトイレの装備された七丈小屋には往年のアイスクライムの名手が常駐して小屋を守っていた。橋本明君の慰霊碑もつつすらと雪に覆われて健在だった。久方ぶりの黒戸尾根の変わりの無さが嬉しかった。

これを受けて年末のクリスマス休暇に4人で出かけた。フル装備で黒戸尾根を登るのは厳しかったが、雪は少なく予定通り2日目に頂上を越え北沢に下り立った。快晴の甲斐駒の頂上からは北岳、仙丈が目の前に広がり、

次の目標は真っ白な王冠をかぶり、まさに女王の気品を備えた仙丈に決まった。

2007年はいささか複雑な年になった。会社の事業成績劣化を理由に退職時期が突然3年も早まり山どころではなくなった。7月から59歳で毎日が日曜日になった。朝の9時から午後の5時まで、ほぼ初めて自分で一日の時間割を作らねばならなくなった。学校や会社はその本来の目的以外に、国民に時間割を与えて規律正しく暮らさせるという極めて重大な機能があることがよく分かった。そこでヒマラヤが浮上し、10〜11月にかけてネパール、ダウラギリ東面のダンプス（603



仙丈ヶ岳

5m)に出かけた。さすがだった。5000m超に一週間いるだけであれほど消耗するとは思わなかった。神々しか住めない場所の凄みというものをしっかりと教えてもらった。次はラプチェと心に決めた。

そうしているうちにやってみたが落ち着きの良い時間割はできなかった。やはり年齢的にちよつと早いのかもしれない。知人のつてで再就職することにし、それを決めて年末のクリスマス休暇に3人で仙丈に向かった（1人はひざの故障で断念した）。高校2年の最後の春山合宿で出かけながら登れなかった40年越しの因縁の山でもある。

戸台からの長い河原は秋の台風の水害で谷全体が巨大な岩に埋め尽くされていた。昔とほとんど変わらない北の黒戸尾根にひきかえ、林道が山肌を切り裂いた南側は脆弱になり、ひたすら崩れるに任されている。昨年甲斐駒からの下りの折には丹沢からほどない地点にある疎林の底に苔むした岩がいくつも転がり、冬なのにまるで緑のじゅうたんが広がっているかのようだった。その一帯がごっそりと流れに呑み込まれて無くなっていた。

戸台発11時、大平小屋着4時半。夜半から雪が降り出した。翌日降り積もった雪の中を北沢經由仙丈へ向かうが正月前のクリスマス休暇ということでトレースは全く無い。5時

半発。雪はほどなく膝を超え、腰に至り、そして胸までになる。久しぶりのラツセルも最初はわっせわつせと気持ち良いが3時間、4時間……となるとさすがに絶望的になってくる。12時半、雪が囊になりヤツケが濡れる。6時間かかってまだ3合半、諦めて下ることにする。本物の冬山に出会えたがあえなく敗退となった。

2008年2月、日光白根に行く予定が大雪でキャンセル。代わりに雪の丹沢塔ヶ岳と鍋割山を楽しんだ。ここでこれだけの雪を見るのは初めてだが同時にこれだけの登山者を見るのも初めてだった。

そして、4月の雪のある内に日光の白根に向かった。ここも高校生のに計画して以来足を踏み入れている場所だ。丸沼高原スキー場からロープウェイで1900m地点まで一気に登り、白根山の北の座禅山の麓にテントを張った。4月の上旬とはいえ雪は豊富でやたらに寒く、人は全くいない。火山のせいで一帯は複雑な起伏に富み、景色は一步毎に姿を変え、それにあわせて山を上下するリズム感が楽しい。頂上からは北に尾瀬の燧ヶ岳の見事な双耳峰、越後の山々が望めた。

年末は昨年断念した仙丈以外には無かった。それが終わらなくて次は次にゆけない気がした。クリスマス休暇ではなくまさに年末

だったので戸台の河原の駐車場は満車。昨年同様戸台発11時、大平小屋の近くには16時に到着した。雪は極端に少なく、山本健一さんの遺品のMossのテントを広げた。重量は6キロと重いが前室もあり抜群の居住性だ。

翌日は3時半起床、5時15分出発。暗い中、樹林帯を快調に登るが林の中なのに風が冷たく強い。7時半には昨年引き返した地点(3合半)を過ぎ、10時には小仙丈岳(2855m)に着いた。全員ワカンを持参したが全く必要が無い。しかし、かわりにとつてもない風だ。二点確保しても飛ばされそうになる。吹雪の中に数人の登山者の影が見えるが誰もがそれからの痩せ尾根への前進をためらっている。

また駄目か？ 10時10分、残念ながら撤退を決定、すっかり落胆して昨年からすれば2度目の下山にかかる。3合目の小さな平地にテントを張っている若者がいた。聞くと夜叉神峠からスタートし光まで全山縦走するという。12時45分テント場着。

テントに落ち着いて明日はどうするかという事になった。スベアが一日あるが、すっかりくたびれて再挑戦の声は上がらない。その内1人は今日の下りで足を痛めてしまった。新宿に出てカラオケで忘年会をしようとな

どという意見まで出る。ここまで来てそうは行くまいということでは僕はどうか登れそうな山への転進を提案する。風は次第に収まり、テントの窓を開くと夕日に輝く穂高連峰が見える。

夕食の後アルコールが出たところで再び協議。やや元を取り戻したのを見計らって明日も行くぞとけしかける。すると1人が「何時起床だ？」と来る。しめた！と思いつつ、「今日よりゆっくりで5時だな」と答える。本人は満更でもなさそうだが、他の2人は「本気か？」という顔をする。アルコールがさらに進む。「行くなら3時起床だ」という声がある。1人から上がる。時は夜8時、ようやく再挑戦が決まった。

翌朝は予定どおり3時起床。テントの外を見ると見事な星空、風も無い。それぞれ持参の簡単な食事をして5時出発。4人の朝食で出色は「サトウのごはん+納豆+長ネギ」という意外なレシピ。僕はレトルト入りの粥を持参したが味の不自然さがどうにも耐え難い。しかし、その考案者は昨日足を痛めて再挑戦は諦めた。

見事な晴天だった。6時55分、3合目を過ぎたあたりで日の出になった。光が射し込み右手に摩利支天のごぶを従えた甲斐駒の怪異な姿が浮き立つ。9時小仙丈、甲斐駒からは

王冠と見えた日本3大カールのひとつが巨大な壁となってこちらを包み込むように目の前に広がる。昨日の吹雪に清められた純白の斜面の上に小さなピークがあり、その背後でさらに小さなピークが光る。それが頂上だ。稜線上にその頂上をめざす登山者の姿が小さく見える。それからほぼ1時間半、10時半に頂上に立った。意外に遠い稜線だった。最近でいえば3度目のトライ、初めてここを目指して以来でいえば43年目の頂上だ。思わず3人で握手を交わす。

仙塩尾根に人影が見える。昨日3合目で幕営していた全山縦走の若者だ。その先は三峰岳まででさえ延々と遠い。そのさらに先の遙かな山なみを見ると気が遠くなりそう。小声でガンバレとエールを送る。今でもそんな登山者がいることに感動する。

ともあれ、快晴の雪の山頂はいたくおだやかで、日本中の山々が見晴るかせるようだった。山を下りながら次の目的地はすぐ隣に見える北岳に決めた。

わーアルプスみたい！

若林 貴之（昭53年卒）

アルプスみたいだ！とテントに帰って興奮して言ったら、どつと皆に笑われた。そんな記憶が残っている1年の涸沢夏合宿。雪にあまり縁が無かった九州から上京してきた山初心者の私にとってポスターやテレビで見ると美しい山の写真や映像はヒマラヤやヨーロッパのアルプスであった。その私にとって夏合宿のその日のメニューであった横尾本谷左保を遡行し横尾本谷カールに飛び出た印象は写真で見るヨーロッパアルプスのものであったのだ。

涸沢からいったん下り、横尾本谷に入り、輝く夏の太陽のもと、大きな岩を迂回し、ほとばしる水しぶきを浴びながら川を遡行し、やがてガレ場をリーダーの前神さんの後をただひたすらに、よじ登っていくのに必死になつていた。その時、視界に突然、紺碧の空と岩と雪とハイ松のカールが飛び込んできた。しかもそこには我々以外誰もいない。地

上の樂園のように思えた。

私と沢登りの初めての出会いはこのようにとても感動的であった。その後、多くの山行を山岳部の先輩や仲間と共に行っていたが、さまざま山を楽しむを味あわせていただいた中で、沢登りはとても好きな山登りとなった。藤本先輩に連れて行っていただいた、ほとばしる水量が圧倒的だった南アルプスの奥西河内沢。前神先輩に連れて行っていただいた秋の情緒あふれる奥利根源流。兵藤先輩に連れて行っていただいた延々と続くナメ滝の爽快な北海道のクワンナイ沢、などなど。

わらじを利かせての遡行淵をへつたり、滝の直登や高まき、単調な登りではない変化があきさせないことや、道が無い山を登り詰め頂を目指すという山登りの醍醐味を味わうことが出来るということも沢登りの魅力だと思つ。ビバークした時に釣れた岩魚を皆で頬張る美味さは最高。

とは言いつつも、その後の私の山行は3年生の1学期をもって中断し、今もって再開する気配は無い。しかしながら一橋山岳部の一時的記憶は今もって私の脳裏にさん然と輝いている。まことに私を山登りとの出会いに導いてくれた同期の松田君と佐藤君に感謝。共に遊んでくれた同期の浅田君に感謝。そして全くの素人の私に山登りの魅力をたくさん教

えていただいた先輩に感謝。楽しい山行を共にしていただいた後輩に感謝。さらには山岳部を途中で退き貢献できなかった私を今また針葉樹会に温かく迎えていただき、誠に感謝の念に堪えません。

現在、これからもどれだけ山にかかわれるか全く未知数ですが、皆様方のご厚意に厚く感謝しておりますので今後ともお付き合いいただけますようお願いいたします。

十三参りで飯豊登山

斎藤 誠（昭63年卒）

山国、会津に生まれ育った私だが、毎年山開きが行われる裏山的な明神ヶ岳（1074m）に何度か登ったほかには、高校時代、友人と磐梯山へ登った程度の山登り経験しか持ち合わせないまま、ひょんなことから大学では山岳部に属することとなった。

父もまた、尾瀬や雄国沼、駒止湿原など近在の高層湿原を愛し、たびたび私を連れて訪れてはいたが、本格的な山登りとは無縁で、

現在では里山と呼ばれる集落の共有林の管理などの共同作業に汗を流していたようである。

大人になるための通過儀礼として数え年十三歳になる子供達が飯豊山に登っていたという話は、祖母から夢物語に聞いていた話のような気がする。

いったん、東京で就職はしたが、縁あって故郷で働くようになり、二男一女に恵まれた私にとって、こどもが数え年十三歳になる年、つまり小学六年生の年に飯豊山に登ろうという計画は、いつ頃からであったか、今からでは定かでないが、子どもや妻に言い聞かせてきた呪文のような言葉だった。

飯豊山への登山経験は大学二年の冬合宿（秋の偵察あり）が最初で、磐越西線の日出谷

2006年8月、長男と飯豊山頂で



駅から美川沿いに水晶尾根を大日岳に登り、御西岳、飯豊本山を経て三国岳から山都の川入に下りた、長く、吹雪に苦しめられた辛い記憶が最初のもので、帰郷してからは何度か、山スキーや年末の登山に挑戦していたことがある。

我が家の登山も、磐梯山の山開きに一家で参加したりはしたが、それ以上に熱中する程のものではなかった。子供用の雨具は持っていたが、靴は新たに購入し、平成18年8月20日を迎えた。ルートは信仰登山のメインルート、山都の川入からの登りと決めた。

さて、どこまで行くかだが、どうせ行くなら最長ルート、新潟県の大石ダムを目指すこととした。大した登山経験のない長男・匠だが、途中で下りるエスケープルートは多々あるため、目標だけは最長ルートとした。

住んでいる福島市から山都の川入まで約2時間、妻と娘に車で送ってもらう。天候は晴れ。7時40分、出発地となる御沢小屋着。見送られて慣れない一歩を踏み出す。

下十五里、中十五里、上十五里と歴史的な地名の休憩ポイントを経て、峰秀水の水場で休憩。両側の切り立った剣ヶ峰を恐る恐る越えると、ひよっこりと三国小屋に出る。12時30分。本山から大日岳に至る稜線が雄大に広がる。いい加減へばりながら、早実ハンカチ

王子と駒苦マー君との死闘を時々入るラジオで聞きながら、初めて見る万年雪に歓声を上げ、切合小屋14時15分着。2時間先の本山小屋を目指すかどうか迷うが初日でもあり、この小屋に荷を降ろす。夕食は簡単にレトルトを温め、夕焼けをさかなとする。

2日目の21日は曇り。5時20分に小屋を出る。御秘所と呼ばれる岩稜の難所を越え、7時、飯豊神社に着いて、夏の間だけ開いている神社にお参りする。宮司さんは今日山を下りる予定だとか。お札やお守りを購入。若干西に位置する飯豊本山の三角点に移動して記念撮影。7時半。御西小屋へ向けてトリカブトやミヤマリンドウなど、花の稜線漫步を楽しんで、8時40分着。コースタイムでは御西小屋から往復3時間半の大日岳を往復するかどうか迷うが、長男の意見を容れて、そのまま梅花皮小屋を目指す。12時50分着の長丁場。

しばしの休憩。小屋番のおばさんが長男の足をマツサージしてくれて、大分やる気を取り戻す。門内小屋へは13時40分着。ここで泊まるか次の頼母木小屋を目指すか迷うが、気合いを入れて次を目指す。出発して程なく雷雨、それも本格的な雷雨となり、靴はびしょ濡れ。15時50分、へろへろになって頼母木小屋着。先客、単独行2名。引いてある水が

平場のキャンプ場のように見事で感動したが、同宿の1名は地元の役場を退職して写真を撮っているという方であったが、やれ、荷を濡らすとは、パッキングが問題だ、寒かろう、毛布を使えと、いささか過干渉で興奮させた。夕食後外に出ると一瞬の夕陽。明日の尾根がくつきりと望める。

3日目の22日は6時10分に小屋を出ると7時50分に杵差小屋着。大石ダムへの下りを尾根伝いの東コースとするか沢沿いの西保コースとするか迷ったが、昨日の雷雨の印象が

2008年8月、次男と御西小屋で



強かったので、沢ルートはあきらめ、尾根沿いの東コースを下りることとした。このあたりまで来ると、通る人の数も限られ、道もよく手入れはされていたが、踏み固められてはいないような部分もあった。12時20分林道終点に出る。終わった！はずだったのだが。

河原で足を洗い靴をサンダルに履き替え、携帯でタクシーを呼ぶぞとはりきったまではよかつたが、いっこうにつながらず、いまかいまかと待ち望みつつ、ついに林道中で携帯が通じることはなく、2時間、10kmほどを歩く羽目となって、長男の印象は頗る悪化した。ともかく14時45分大石ダム着。2泊3日の飯詣で完了。米沢で焼き肉を食べて福島へと戻る。

2年後の平成20年。奇しくも同じ8月20日。次男・薫と2人、再び飯詣を目指すこととなった。ルートは当初、横断を考えたが、赤谷林道が落石のため通行不能で、魅力の下がる実川ルートを検討したが、アプローチの悪さに比して、ルートの魅力に乏しいため、2年前と類似のルートではあるが、山口だけ山都の川入ではなく、西会津の弥平四郎からとし、目的は杵差から西保を沢沿いに大石ダムへ降りる最長ルートとした。

8月20日、台風接近の最悪の予報の中、妻

と娘に車で送られ、8時40分弥平四郎登山口を出発。この日は辛うじて晴れ。11時20分、疣岩山いぼいわやまへの稜線に出る。剣が峰のような難所はないが、変化がないぶん登りがきつく感じられる。12時半、三国小屋着。ここで前回のルートと合流。小屋番から例年本山神社に夏の間入っていた宮司さんが山菜取りで道に迷い亡くなったとの話を聞く。お札、お守りを楽しみにしていただけに残念。14時20分、早めの切合小屋着。大日岳、飯豊山の雄姿を仰ぐ。

21日予報通り大荒れの天気。本山往復で下山という選択肢も脳裏をかすめるが、強行。小屋はツアー客で満員状態で、雨なのに小屋の外での火器の使用を迫られ、ムツとする。使用火器がホワイトガスのせいもあるが、5時45分出発7時15分本山神社。宮司のいない祠に合掌。横殴りの雨の中、足早に本山三角点を越え8時50分、御西小屋。小屋番の方に温かいコーンスープをこちそうになる。冷えた身体にうれしい。

往復2時間弱で思ったより短時間で大日岳を往復。御西小屋で1時間の大休憩を経て12時10分、梅花皮山荘を目指して出発。雨の中15時山荘着。50〜60代の静岡組2名と60〜70代の京都組10名ほどと快適な2階をシェアする。翌日、丸森尾根を小国方面へ下りる

こととする。

22日6時出発、雨だが強くはなく時折止む。7時15分、門内小屋、時折晴れ間ものぞく。9時丸森峰、11時半、飯豊山荘着。通りかかったタクシーで国民宿舍梅花皮荘へ。最悪の天気予報の中、辛うじて晴れ間を縫うことのできた3日間だった。締めは米沢で焼肉。

2人ともまた行きたいとは言わないが、父子2人きりの山旅の記憶は深く残っている。世が世なら女人禁制の山ではあるが、2年後、娘の環と登るのが今から楽しみだ。どんなルートをたどろうか。

アジア往復旅行1年2ヶ月 出会い・交流

田形 祐樹（平6年卒）

法曹関係者との出会い

ネパールのボカラでは裁判所に行くことと弁護士が何人かいた。話しているうちにそのうちの一人が「うちの事務所に来いよ」と言っ

て行くことに。事務所といっても質素なもの。広くない部屋に机一つ。背後にある法律書が弁護士らしさを示している。

弁護士会の建物にも招いてもらった。そこで行われている弁護士の会合も一緒に混じって見せてもらったり英語学習会のゲストスピーカーとして日本について話をしたりした。同じ職業ということで、話がよく通じ大いに盛りあがった。

ネパールの、ブツダ生誕の地ルンビニでは裁判所の裁判官室で裁判官に会って話を聞くことができた。とてもオープンな雰囲気で大いに感激してしまった。同じことが日本で起こるだろうか。

イランでは女性弁護士に会い、パーティーに招いてもらった。イランでは女性弁護士の方が優秀よ！」と気炎をあげていたので近くの男性弁護士に確認したところ否定しなかった。

偶然の出会い・交流

偶然に知り合つて家や職場まで招待されてお茶をいただいたり食事をいただいたりしたことはそれこそ数え切れないほどあった。

イランでは両替をするために寄つた銀行の支店長がお茶を、インドではバスで横に座つた人が家で食事を、アルメニアでは通りが

かつた農家のおじさんが昼ご飯を、トルコではピクニック中の家族連れが昼ご飯を、などなど。偶然知り合つた人に泊めてもらったことも何度があった。

バングラデシュでは世界遺産に指定されている仏教遺跡群に行くバスで仏教関係者の人たちと会つた。彼らは当地での得度式に出席するという。その仏教会の幹部（その人は僧侶ではない）と行動を共にすることになった。私もその得度式に出席し、恥ずかしながら英語でスピーチまですることになった。首都のダッカに帰ってきたから泊まりにきなさいと言われたことをいいことに、彼の家で2泊させてもらった。

インドでは列車内で偶然知り合つた紳士に誘われて彼の兄の家で4泊もさせてもらうことになった（前回の稿）。彼は現在はイギリスに移民しており国籍はイギリス。今回は里帰りしていたわけである。彼と彼の親戚はシーク教徒。ということでシーク教の寺院に連れて行つてもらつたり、彼らの集落を案内してもらつたり、普通の観光客は絶対来ないようなところに行き、一般庶民の生活を間近でみる非常に貴重な経験をした。

アゼルバイジャンの首都バクーで会つたイラン人は、私がこれからイランに行くと言つたと「ぜひ私のところに来なさい」と言つてく



インドで偶然知り合った人に4泊させてもらいました。
夜は暑くて外で寝ます。

れた。ずうずうしい私はそれを真にうけて、イランに行くとは本当に連絡した。彼は大きに感激して迎えに来てくれた。彼は若いころに空手を習っていたこともあり、日本のことを大いにリスペクトしていることが伝わってきた。彼の家にも泊らせてもらい、家族だけでなく親戚とも交流することができた。その時はちょうどラマダン（断食月）だったので夜にはラマダン用の特別な食事も振る舞ってくれた。

「ホスピタリティクラブ」

「カウチサーフィン」とは

以上のように偶然出会った人たちとの交流はとても印象に残るものだ。ただ泊まらせてもらうとなるとやはりお互いに敷居が高くなる。それに必ずしも深い話ができるわけではない。

そう思っていたころインドで知り合った人に「ホスピタリティ・クラブ」というインターネット上のサイトについて教えてもらった。このサイトは一言で言うところ「外国からの旅行者と交流したい」という人たちが集まったサイトである。完全にボランティアのサイトであり料金は発生しない。

「交流のスタイルは単に会ってコーヒーや食事をしながら話をしたり街をガイドすることから、家に泊めてあげることまで含む。その人の都合で選べる。すべてがすべて泊めてあげる必要はない。

交流したい人はこのサイトに登録をして自分のプロフィールを公開する。「職業」「話せる言語」「興味があること」などでも検索することができる。そして交流したい人にメールでアプローチして交流可能かどうか打診するのである。

インドでこのサイトについて聞いたが、「タダで泊まりを頼むほどお金に困ってはい

ない。それになんとなく面倒くさい」と思っていてしばらく申し込みもせず使わないでいた。しかしトルコのイスタンブールでトルコの弁護士に会って話がしたいと思って初めて利用してみた。おかげでトルコの弁護士とトルコの弁護士事情など突っ込んだ話ができて非常にいい経験ができた。

ホスピタリティあふれるイランではこのサイトを利用したら全宿泊の半分以上がこのサイト利用での宿泊になった。テヘラン大学日本語学部で日本語を学んだ人、現在日本語を勉強している人、日本のアニメやITなどに関心がある人など、私との交流を非常に喜んでくれた。家族や親戚とのパーティや食事に招いてくれたり家庭料理を振る舞ってくれたり街をガイドしてくれたり……。もちろん日本に関心がなくても純粹に外国人旅行者と交流したいという人もたくさんいた。

他の国でも日本のことやその国のことについて大いに語りそして質問し合った。通常の旅行者には語らないような、その国の政治体制や経済状況などについての「本音」も語ってくれた。

このサイトの目的は旅費を節約することではない（物価が高い欧米や日本では結果として大いに節約できるだろうが）。サイトにも「世界中にタダの宿泊所を設けるのが目的で

はなく、家と心を開き、異文化が生む、幅広い知識の共有を助けることが主目的。旅のスタイルだけでなく、個々の世界とのつながり方を変えたい」とある。

このようないい思いをアジア旅行でさせてもらったので、日本に帰ってきてからはできるだけ恩返しをしようと思っている。横浜ではフランス人夫婦をガイドし、伊万里でもスイス人サイクリストに2泊してもらった。こうした交流は異文化や自分が知らない世界について話を聞くことができ大いに刺激になる（私も自転車で世界ツアーをしたくなってしまう）。

なお「ホスピタリティクラブ」とほぼ同じコンセプトのサイト「カウチサーフィン」もあり、私はこちらのメンバーにもなっている。そして今も、交流した人たちとメールでのやりとりが続いている。アジア各地の彼らといまでも繋がっていると思うととてもうれしい気持ちになる。メールをもらったたびに彼らとの交流の日々が鮮やかに蘇ってくるのである。

兩飾山フトンピシ右岩峰中央稜 「忠実リッジ」ルート（仮）登攀

山田 秀明（平15年卒）

これまで幾度も脆いところに行ってきた。「ワニ」（海谷駒ヶ岳）で「本当のモロさ」の意味を会得した気持ちにもなっていた。しかし、それは甘かった。完全に甘ちゃんだった。

社会人山岳会の女の子が松木沢ジャンダルム頂上で号泣したということを内心微笑ましく思っていたが、今回、恐怖で泣くということがどんなことが良くわかりました。今回、男の子だから涙は見せなかったけど、心では泣いちゃいました。そして、「俺にはリードできませぬ」と泣きもいれさせてもらいました。だって、あまりにコワかったんだもん……。

そう、これまでやってきたいるんな岩登りのルートを思い返しても、これほどの恐怖感を強いるところが今まであったらうか。いや、ない。絶対じゃないのです。トリカブトでも谷川幕岩でもサナシでもワニでも屏風岩大ジエードルでもこんな感情は一切起こらな

かった。難しいとか簡単だとかそんなことはどうでもいい。怖いか怖くないか。ビビるかビビらないか。それこそが、問題なのです。

わかるか、あの激ヤバ弁護士クライマー古田さんの「今までで一番ヤバいかも」という呟きを聞く気持ちが。

わかるか、「僕が落ちたら反対側に飛んで！」とお願いされた気持ちを。

わかるか、ランナーをすべてピナクルからとっているのを見ている気持ちが。

わかるか、落とした大岩が一つ目の衝撃で砂となって落ちていくの見る気持ちが。

わかるか、グラグラしているリッジに馬乗りしているのを見ながら見る気持ちが。

わかるか、わけのわからないピナクルを支点に馬乗りの体勢でブレいされている気持ちを。

わかられてたまるか！ 私はフォロースタイルだけだったが、フォロースタイルでも唸然として見ている光景をすぐに追体験しなければならぬ。もれなくもれなく。

ああ、思い出す。あの黒部の怪人、和田城志氏が「山登りの良い悪いの基準は、ビビるかどうかだ」とあっけなく書いていたことを。その基準において、今回の登山は私の登山歴でも間違いなくナンバーワンの良い山登りだった。そして、私は、今後、どのような山

登りを実践しようともフトンピシ中央稜のあのナイフリッジのことは忘れまい。

行きの車中で古田さんから悪い草付きで威力を発揮するという「ハンマーアプミ」なるテクを伝授してもらったが、だいたい単独行でその効果を確認したというのだから、まったくもってオカシイでしょ。僕がまだ正統派だった7年前、初めて連れて行かれた本格的な沢（水無川真沢）で、いきなりノーザイルでスノーブリッジから草付にジャンプ、



1ピッチ目。ギザギザの稜線が中央稜の核心部（山田撮影）

ダブルアックスランジをかましていたのを見て、「ウソだろあ」と思った（今でもマネできない）けど、まちがいにく当時よりもさらにパワーアップしている……。まあ、今回はフトンピシだから大丈夫だろう……。そう、思っていた。

駐車場で仮眠していると朝5時ぐらいから周りがうるさくなる。さすがに百名山。ジジ・ババが賑やかに準備し始めているのだ。2時間しか眠れてないがしやうがなく、こちらも起きて準備する。

1時間で荒菅沢出合。出合ちよつと前からフトンピシが眺められる。確かにきれい。そしてこれから行くこうとしている中央稜がバツチリわかる。モチベーションが上がるというもんだ。

荒菅沢は水に浸かることなく溯行できる。しかし、「ゲツ、雪あるじゃん」。右に折れ、ちよつとゴルジュっぽくなった先に、スノーブリッジが横たわっていた。心の準備はまったくしていなかったが、左側から簡単に渡り150mほど歩くと途切れ、簡単に下りられたので良かった。下りたところがフトンピシスラブの基部。ここまで駐車地から1時間半ほど。結構近い。

基部でクライミングシューズに履き替え、白いスラブをスタコラ登る。中央稜は末端で

二つに分かれ左は藪の着いた緩いリッジで右が藪の少ないスツキリしたリッジ。どっちに行くかとなれば右しかないでしょう。そっちに向かつてスタコラ、簡単なスラブを登る。あー、ふくらはぎ、イテー。登るにつれ、傾斜がだんだん強くなり、脆くなってきた。そろそろロープ出そうかという感じになってきた頃には、いい支点が得られそうもないところに突入していた。何とかキヤメ#0・5で取れるところがあったので、そこからロープを出すことにする。クライミングシューズを履いたところから250mほど歩いたところになるだろうが。

1P（古田、+、45m）

難しくないだろうと思っていたが、灌木もリスもなく、あまり支点が取れない。そのうえ脆い。それなりに怖いよ。45m伸ばしたところにカムで支点が取れるところがあったのでここまで。

2P（山田、+、25m）

1P目と同じ感じ。左リッジとの合流点下は傾斜があるが、左のルンゼ状を登ればそこだけは岩が堅い上にカムでランナーが取れるので一安心。合流点にリングボルト3本打たれたテラスがあったので、短いけれど、そこで切る。

3 P (古田、 、 25 m)

ここからナイフリッジ。日本でこれだけのナイフリッジはそんなにはないのではないかと、壮観な光景がある。しかも脆い……。

最初はリッジを忠実にあとは左から登り、再度リッジへ。残置ピンは結構あるので多少安心。ロープの流れが悪くなってきたので、ハーケンが2本打たれた窓をビレイ点とする。

4 P (古田、 +、 25 m)

なおもナイフリッジが続いているが、ルート図でも最近の記録でもこの窓から左側へ懸垂し、ナイフリッジを巻いて再度ルンゼ状に登るようだ。つが、リッジ上にも残置が見え、可能性が見えていた。ラインも合理的。そして何といてもカットが良い。だからこそ古田さんが「こつち行こうよ」と言ったのを止めもしなかった。といつても雰囲気は明らかにヤバい。順番的には私がリードだが、そこはお譲りして……。

いきなり苦労して登っている。なんだか崩れそうなりリッジに全体重をかけてリッジに乗り、厚さ20 cmほどのリッジに馬乗りになって進んでいる。

窓に立ち、ピナクルでランナーをとる。このあと、核心部の途中のランナーはすべてピナクル。途中見えていた残置ハーケンはず



4ピッチ目。リッジの幅は10センチ……
(古田撮影)

て手で抜けるのだ。ダメされたーという感じだが、リスもない。「これ剥がれそうだから落とすね」という岩を落とすと、普通力ランカランといひ音立てながら落ちるはずの岩が、最初の衝撃で粉々になり、砂となって落ちていく。一人、静かにそれを見ていた。……：……。うーん。リスがあつたとしても岩ごと落ちそうだ。

「今までで一番ヤバいかも」とうれしそうに（一）呟きとともに「僕が落ちたら反対側に飛んでね!」とお願ひされる。ヤバいぜ。あのヤバい古田さんが一番ヤバいと言っている。これはホンマもんだ。いやいや、反対側に飛ばないと……。雪稜じゃないんだから……。だいたい稜線はまさにナイフ。そんなことしたら5割の確率でロープ切れそうだ。「大丈夫

夫、ロープ2本あるから!」なんて言われてもなあ。それでも2本とも切れる率は2割5分じゃないですか。俺の草野球の打率並みだぜ。「いや、やめてくださいよ」と抗議するが、古田さんは完無視してそれを意識するようにしてロープの流れを調節していた。

再度、無言になり、さらに進む。「なんだかこれグラグラしてるよ」と言う岩にやはり馬乗り。さらにはそこに立ち、厚さ10 cmのナイフリッジに全体重をかけてリッジクライミング。再度、馬乗りになり……。「バカじゃねえの」と思う光景が目前で展開されている。しかし、明日、いやあと10分後はわが身に振りかかる景色なのだ。現実的になると、もう恐ろしさしかない。しかも、さつきまで晴れていた天気が、ガスリ始めている。風が心地よいというか、なんかジェットストリームの感じ、この風さえもなんか恐ろしい予兆なのではと敏感になってくる。

ランナーはピナクルを使うが、だいたい長スリングなんてそんなに持っていない。古田さんは長スリングがなくなった、ここでピッチ切るよ」と言いビレイ体勢に入り始めた。ん? どう見てもただのナイフリッジ上なんですけど。えっ、支点はピナクル、しかも馬乗りでビレイですか……? 少なくとも、教科書的にはそんなビレイ点はありません

ですが……。……。まず間違いないのは、フォローでも絶対に落ちられないということ。こんなこと誰だってわかる。

覚悟を決めて俺も見たまんまのクライミングを実践していく。グラグラしているリッジに馬乗りし、いかにも折れそうなリッジに全体重をかける。こ、こわい。さらにはこのリッジには星穴みたいに穴が開いているところもあった……。なんとか、古田さんのところに着いた。この再会がとてつもなくうれしいこと、うれしいこと。なんだか「うえーん」と号泣したかった。間違いなく今年一番のフォロークライミングだった。技術的には、マイナス程度だろうが、精神的には確実に 級。

5P (古田、45m)

そんなナイフリッジはさらに続いている。順番的には私の番。このピレイ点には入れ替わられるだけのスペースもない。しかし、4P目の終了点にて私はあんな感じだから、もちろんリードする気もないし、できる気もしない。ここぞとばかり、泣きを入れた。「俺は絶対にムリです。先輩、お願いします！」と。負け惜しみで言わせてもらえば悔しさだとか反省、そんな感情は一切ないよ。分相応を弁えていると言っただけ。人間には得意・不得意というものがある。俺には「オシム」(オ

シいけどムリ)なのだ。一方の古田さんは実はああいうところ、好きなんだよ。喜んでやられる方なんだよ。思ったとおり「しょうがないなあ」と言いつつまったく嫌なそぶりも見せずリード体勢に入っていくのは、素直にうれしかった。甘えが利く大学山岳部の上下関係がこれほどありがたかったことはない。

今回もやはり折れそうなナイフリッジに全体重をかけることから始まる。しかも足場はないに等しい。だが、上手く安定した登り方でリッジを進んでいく。驚きの光景が続いているはずなのだが、この頃になると慣れてくる。慣れは恐ろしいものだ。そんな感じのリッジを20mぐらいいれば、落ち着いた。半端ないナイフリッジは終了だ。あとはしっかり利いた残置がたくさんある。級程度の岩場をロープいっぱいまで登る。

6P (山田、45m)

ここまでくれば、俺にだってリードはできるさ。引き続き、級の岩をロープいっぱいまで登ると灌木帯になる。

ここでロープを解き、靴を履き替える。すると「このロープ、実は10年以上前のものなんだよね」と古田さんが感慨深げに言うではないか。うん。あの核心部分でこのコメントを聞かなくて良かった。2本とも切れる率は私の打率どころか、イチローの打率ぐらいは

あつたようだ。よかった。よかった。

簡単な藪漕ぎリッジを10mほどすると平らになり、あとは藪漕ぎだ。すぐそこに登山道があるはずで実際にヒトの姿も見えるのだが、ハマるとこの藪はすごい。背丈以上もある笹はとてハードだ。しつかりルーフアイをしなから登山道まで行くと、いい平地だった。

そこに荷物をデポして、雨飾山の山頂へ往復15分。あまり視界はなかったが、登山道からは中央稜のリッジが見える。す、すげえ。きつと、あそこを登っている姿はさぞカッコよかつただろう。イヤ、馬乗りだったからカッコ悪いか……。アハハッ。そう会話できるのはなんとも平和な証拠だ。

あとは登山道を1時間半ほど走り下れば駐車場。古田さんとがっちり握手させてもらった。

古田さん、いい勉強させてもらいサンクスでした。お供できたこと、心より感謝です。「リッジ上で地震来なくてよかったね」という一言も、あの核心で言われなくてよかったです。考えただけでもゾツとします。また、別れ際、「今回、超楽しかったよ」と言ってくれたこと、いろんな意味で心に響きます。

(2008年9月)

会員だより

新年会への返信ハガキから

深谷光茂(昭16) ご盛会をお祈りいたします。

私も89歳、元気に過しております。

小林茂雄(昭19) 先輩諸兄を想い出す機会のみ多くなりました。

西村 勝(昭28) 相変わらずの持病のため欠席させていただきます。ご盛会と皆様のご健勝をお祈り申しあげます。

奥野巖根(昭31) 去年6月以降、大腸癌の手術、ポリプ除去、十二指腸かいようと三度入院。暮ぎりぎりに退院、目下寝たきりの為弱った脚を強くして居る処です。

西海隼雄(昭33) 特記事項なし、幹事・世話役の各位御苦労様です。

新井慶司(昭33) 雑事多忙のため、欠席いたします。

中村 保(昭33) 2月中旬から英国・アイルランド・ドイツへ出かけます。まずロンドンで

Alpine Club の名誉会員推挙を受け3ヶ所で講演を。ドイツでは Die Alpen Tibet の英語版の打ち合わせをします。

沢木一夫(昭34) 本年は中村保さんの受章や佐藤さんたちのキリマンジャロ遠征等素晴らしいことが続きましたね。私みたいに諸般の事情から「高尾山」の枠から出られない者にとつては益々敷居が高くなってしまいます。皆様によりしくお伝え下さい。

宇田川徳治(昭34) 無事に暮らしています。ヤマは高尾山の20〜30年振り……という程度。

市川陽一(昭34) 近場の京都・滋賀の山に今年もひんぱんに出かける予定です。雪溶けの季節を待つて4月以降10月頃迄アメリカの山にもひんぱんに出かけたいと思っています。が、1年前に傷めた左ヒザの大腿四頭筋腱が完治して居らず、これがユウウツです。来年は後期高齢者の仲間入りですのでムリは出来ません。

小峰 隆(昭35) 元気にしています。2月に北海道キロロでのスキーを予定しています。昨シーズンはトリノのWinter 2006年のオリンピックク

会場へ出かけました。

中西 巖(昭35) 多忙のうち、元気に毎日をおこなっています。

三股 宏(昭36) 完全リタイヤし、ノンビリやっています。

多田伸治(昭38) 如水会報のキリマンジャロの記事、皆さん立派ですね。元気をもらいました。HPも楽しく見えています。今年もよろしくお願ひします。

村上泰介(昭39) 昨春より広島市大の大学院で応用言語学をお勉強中です。今年は修論に追われるように、お陰様で退屈せずに暮らせそうです。ご盛会と諸兄のご健勝を。

中橋寿雄(昭39) 老化とともに頸椎症の後遺症等による右足の痛みが一段と強くなっています。が、無理のない範囲で、それなりに自分流を楽しんでいます。

三森茂充(昭40) 老年キリマンジャロ隊の遠征元気をもらいました。27日は集まりが重なり、欠席させて頂き。

小野 肇(昭40) 4月から週2回ネクタイをし

めだしました。

藤原朋信（昭44） フリークライミングに集中していますが、全然上達しません。

宮武幸久（昭45） ご無沙汰しております。昨年退職しました。何とか元気でやっております。

若林貴之（昭52） 仕事にかまけて、なかなか山に行けないまま、年が過ぎ去っております。

引地 真（昭55） 最近山登りはごぶさたです。路線バスを乗り継ぐ旅をしています。

石丸義男（昭60） いつもお世話になります。引き続き韓国赴任のため欠席させて頂きます。

川名真理（昭63） 今春から夏にかけて発売されるDVDブック「日本の名峰」シリーズ（放送NHK、出版・小学館）の編集のお手伝いをしています。10月以来、山に行っておりませんが2月は土日3連続で山スキーに行く予定です。

田形祐樹（平06） 伊万里で楽しくやっております。是非遊びに来て下さい（社交辞令ではありません）。

中村保さんが日本山岳会の名誉会員に
推挙され、会長特別表彰されました。

12月6日、日本山岳会年次晩餐会席上で、宮下会長から中村さんの名誉会員章授与並びに中村さんによる「topos animeas」の立上げと9年間に及ぶ編集長として日本の登山動向の世界への発信（海外からの高い評価）などのこれまでの功績に対して会長特別表彰が行われました。

会場では中村さんは、会長や3年振りに出席の皇太子殿下、秩父宮記念山岳賞受賞者（大日岳大雪庇の研究、東海支部の冬期ルートツエ南壁完登2006）と同じメインテーブルを囲んでおられました。

謝辞の中で、偶々本日が74回目の誕生日であるとの発言もありましたが、今年はRGSのバスクメダル受賞を含めておめでたいこと続きで、年末に有終の美を飾られ、同じ針葉樹会員として大変誇らしい気持ちになりました。（竹中彰）

針葉樹文庫開設のご案内

山本健一郎さんが残された山岳関係蔵書の処分に関連して、その後宮川さんのご好意で増山清太郎さんの蔵書なども加えて、北岳の入口旧芦安村の「南アルプス芦安山岳館」の立派な図書室に独立の

書棚の提供を得て、針葉樹文庫を開設することになりました。

形式としては針葉樹会の名前で南アルプス市に寄付することになりました。

基本は山本さん、増山さんが個人で収集された書籍で、不足分に倉知さん、蛭川さんから提供された書籍などを加えて名実共に針葉樹関係の図書類が網羅されることとなります。

本件については、芦安の山岳館との切っ掛けを作られた上原さん、多面的にアドバイスして来られた倉知さん、それに何よりも文庫の整理、先方との交渉、現物搬入等多大の労力を提供された蛭川さん等の会員のご協力の結果であり、関係者のこれまでのご努力に感謝致します。

会としては何よりも、小谷部さん以来我々一橋山岳部と縁の深い北岳の麓の設備の整った「山岳館」に全巻揃いの「針葉樹」などが常置され広く閲覧の用に供されることを喜びたいと思います。

今後、開設に伴って発生した若干の費用を21年度に針葉樹会として予算化する予定です。また、5月16～17日の懇親山行の際にはこの見学会も予定しております。

今後、芦安周辺に足を伸ばされる方は是非「南アルプス芦安山岳館」で実際に文庫をご覧頂きたいと思っております。（竹中彰）

月見の宴（11月24日）

国立部室にて石原、遠藤（晶）、竹中、小島、中村（雅）、井草、前神、山田、原口の合計9名が参加。

当日はあいにくの雨で、もちろん月は見ることができませんでしたが、そもそも新月だったらいいですが、なかなか楽しいヒトトキを過ごすことができました。

ヨーロッパより帰国（抄録） 中村 保

3週間のヨーロッパの旅から帰国しました。英国 The Alpine Club の名誉会員認証と講演が主な目的でしたが、他に4回の講演を行い、多くの著名な登山家と交流できました。ヨーロッパ滞在中はすべて友人登山家の家にお世話になり、丁寧なもてなしを受けました。クラブ仲間の付き合いの素晴らしさをあらためて実感しました。

2月10日 ロンドン

The Alpine Club にて新会長 Paul Braithwaite さんから名誉会員（Honorary Membership）の認証書授与のあと、講演「ヒマラヤの東 チベットのアルプスと神秘の河」。

Stephen Venable さんの後を継いだ新会長 Paul

さんは62歳、Doug Scott さんのクライミング・パートナーの一人です。Alpine Club のメンバー数は約1300人で変動はないが高齢化には悩んでいます。平均年齢は50歳代半ばのようです。

2月11日 ロンドン

The Travellers Club にて講演。このクラブは1819年に創立、王立地理学協会（1830年創立）より古い歴史があります。参加者は50名ほどで、登山家ではありませんので、民俗とカルチャーの間に麗峰を随所に入れて紹介しました。



ダグ・スコット家で。中村さんの左がダグ・スコット、右端がクリス・ポントン。

2月13～14日 メルボルン（Nottingham 近郊）
 Mick Fowler さんたちにお会いしました。

2月14～16日 北ウエールズ

変わり者の登山家、Julian Freeman-Atwood さんと奥さんに会うのが楽しみでした。Julian さんはマイベースの登山家です。現在はヤルン・ツァンポー源流の山と、特にインド・中国国境の未踏峰ツイ・カンリ（インド名：ネギカンサン）に執着していますが、なかなか中国側の登山許可が取れません。

2月16～18日 湖水地方

湖水地方のヘスケットという古い歴史のある村にいる Doug Scott さんを訪ねました。Doug さんは Community Action Nepal という組織を主宰し、ネパールを舞台にボランティア活動を積極的に展開しており、現在は学校、医療など40のプロジェクトを進めています。

17日に湖水地方ペンリスのホテルで講演をしました。英国の登山家はロンドン周辺より湖水地方に多く集まっています。著名なクライマーが来てくれました。

2月18～20日 ケンブリッジ

19日の夜、ケンブリッジ大学で講演をしました。出席者は学生、若者を中心に約50名でしたが、質問は活発でした。ケンブリッジ大学山岳部の現在のアクティブ・メンバーは30名くらいです。

二月会通信

10月20日

【出席者】石井 山崎 三井 高橋(信) 竹中 高崎(俊) 金子 本間(記録)

話題

皆さんに、キリマン組は今日来るのか、帰りに寄るんじゃないかと言われまして、今日は今日でも今晩遅いので参加は無理でしょうと申し上げましたが、話題は一振りこれになりました。

怪我はなかったか、全員登ったかとかいろいろ話がありました。70歳プラス・マイナスのメンバーがヘッドランプを付けて、1200m登り1700m下りとなれば、無事に帰ってくれば成功でねえの、ということになりました。イヤ、お疲れ様でした。話は来月のこの会でじっくりとお聞きすることで。竹中さんが、伊万里の田形さんを訪ね談話された。隣人曰く「行ってみたいけど遠い、山が無い」とのこと。遠いは兎に角、山は有りそうです。田形さん、高いのは深田さんにお任せして、低くていい山を紹介されては如何。

ドクター 高橋が新分野を開拓。プレートテクトニクス理論による丹沢の成り立ちを紹介。500万年ぐらい昔、はるか南の海底火山がフィリピン海プレートに載って日本に衝突した結果丹沢が出来た

のだそう。静岡糸魚川構造線もその結果でしょうか？ 富士山学の佐藤さん、岩石に詳しい山崎さんと面白くなりそうです。滝谷は岩がボロボロでもう昔のように登れないとか、利尻岳も頂上付近は崩れが顕著でした。この機会に岩を知るのもいいのでは。

山行報告

高橋 9/14 白馬山麓植物園をみた

9/30 谷川岳山麓を歩く

10/8 石垣山。入生田の生命の星博物館を見
た後、先生について登る

竹中 9/20 軽井沢、白糸の滝、鬼押し出し。

長沢ゼミ同期の旅行で散策。広島から村上さん
も参加

10/10 伊万里へ。田形さんの案内で、「腰岳」
(478m)へ、日の出を待つも雲が一部出て残
念。その後臼杵へ

高崎 10/11 麦草峠(往復) 白駒池 紅葉には
少し早かった

金子 10/4 多摩川50キロ(羽村)ガス橋、
職場のメンバー9名と

10/18 会津。田代山(湯西川温泉より往復)
奥さんと。紅葉真っ盛り

山行予定

三井 11/16頃 丹沢、表尾根、大倉尾根、3ヶ
月振りの山です

2月20～22日 ダブリン (アイルランド)

UIAA年次総会で親しくなったダブリン在住の Jos Lynan さんの依頼で講演しました。主宰は1969年創立の Mountaineering Council of Ireland (MCI) です。アイルランドには山岳クラブとして Jos さんも創立に係わった Irish Mountaineering Club (1949年創立) があり現在250名ほどの会員がいます。

2月22～25日 ハンブルク(ドイツ)

拙書ドイツ語版『Die Alpen Tibas』の出版社 Peter DeJong さん、及び四川省の Pat の共同執筆者 Michael さんと英語版の打合せをしました。3分冊とし範囲も四川・青海省までカバーします。松本征夫先生の揚子江源流の山塊も含めます。第1巻目は「念青唐古拉山東部と崗日嘎布」で来春出版を予定しています。その後、引き続き半年ごとに出します。題名も『Alps of Tibet and Beyond』を考えています。

2月25日～3月1日 チューリッヒ

スイスでの休日を楽しました。

(編集部注・全文はインターネットの一橋山岳会のサイトに掲載されています)

高橋 10 / 21 金勝山・官ノ倉山。クラスメートと。200〜400mの低い山

竹中 10 / 27 西丹沢・大室山へ。昼から会メンパーと

金子 11 / 2 香港の山。国連環境計画の写真展開催

本間 11 / 7 高尾山

11月17日

【出席者】石井 山崎 佐雑 中川 三井 遠藤

高橋(信) 蛭川(記録) 竹中 小島 佐藤(久)

金子 西牟田

話題

黒々とした丹沢の後に薄紅色に浮かぶ白い富士。今朝のお山はナカナカ見応えがありました。これもペランダ煙草の余得でしょう。今月本間は体調不良で欠席、記録を蛭川さんをお願いしました。有難う様。

1. キリマンジャロ

先月の会の日に帰国したため今日が初公開となりました(中川さん・蛭川さんに対して「まだ黒いな(汚いな)」の一言あり。二人とも日焼け止めを使用しなかった)。

遠藤さんから概略報告「満月の日を登頂日に選んだが、満月を仰ぎ見られたのは小屋の外に出

たときだけ、歩き初めてからは下を向いてただただ歩いた。続けて、中川さん撮影のビデオを上映。登頂後のガイドとのお別れ会の部分では、ガイドの「キリマンジャロ讃歌」とこちらの「讃山賦」の交換シーンが、周りの席が騒がしくてよく聞こえなかったのは残念。

佐雑さんのコメント 4700mの最終小屋までは順調だった。同日の夜中(出発時刻)まで3〜4時間熟睡したのがよくなかった。頭痛はなかったが、呼吸が普段は1吐息/2歩のところ、登頂日は1吐息/1歩になっていた。ガイドと一緒に降りたが、高度を下げればなんでもなくなつた。それからしても高山病が。

このあと、ダイヤモックスと低酸素室での事前睡眠トレーニング(遠藤・小島・蛭川は最終6000mまで実施)の効用について話題になった。ダイヤモックスも飲まず、低酸素室睡眠も行わなかった中川さんの例もあるので、効用論議は一筋縄ではいかない。

キリ最高齢登頂者は、92歳の男性。ベテランのガイドは、「82歳を登頂させた」と言っていた。一同、まだ可能性があるのか、誰もピークを踏まなかったのだから、リベンジするか。「するならテント生活のマチャメ・ルートか」と佐雑さん。

如水会ナイロビ支部と交流。そのことを含めて、小島さんが山岳部OBのキリ行を、如水会報に投稿。1月号に掲載の見込み、乞うご期待。確

かに、小島さんの山行記とエピソードを併せて読むのも面白いかも。

来年の抱負(夢一ツ)

中川 北岳パットレス。今度は天候の安定している8月上旬にしたい。下山後、芦安山岳館で針葉樹文庫を見て、小谷部さんの霊に登攀を報告したい。

金子 北岳パットレスと「ヒマラヤの東」10〜11月頃の3週間で。

竹中 北岳パットレスと薬師岳(まだ登っていない)。

三井 百名山残り(阿蘇山、富士山、仙丈岳、悪沢岳、男体山)。積雪期の野伏ヶ岳(1674m)と猿ヶ馬場山(1827m)。海外なら、玉山、キナバル。「玉山は森歩きだけです」とのコメントあり。

蛭川 ブータンのトレッキング。桜の時期の妙義山。

小島 夢は多く、絞るのは至難。

高橋 丹沢の見直し(「ぐるり丹沢」の高橋版?)。丹沢は地質的に、地球上でもっとも激動の山。

山崎 白馬岳北方の風吹大池周辺・梅池のリフト利用。北アルプス最大の池だそうです。

佐藤 心臓検査は無罪放免。いい計画があれば国内外どこでも。佐雑さんがキリのリベンジするならば是非同行したい。

懇親山行と月見の宴

蛭川さんから12/7の懇親山行、金子さんから11/24の月見の宴の案内。後者は、学生の都合でこの時期になったもので、遠藤・高橋・竹中・小島が参加。

山行報告

大室山(西丹沢) 10/27 竹中夫妻・蛭川・本間 昼から会会員3名久し振りの昼から山行。西丹沢バス停9時35分、大室山13時30分。犬越路への登下降はかなりキツイ傾斜。

山崎 11/13 箱根・三国山 紅葉・天気とも最高。

佐雑 11/14 足柄峠越え。同行・・高崎・鈴木

三井 11/16 丹沢・塔ノ岳 表尾根から大倉尾根へ、9時〜17時。8時間かかった。

高橋 11/11 高尾山〜小仏城山 旧甲州街道を相模湖に下る。

竹中 11/14 京都・鞍馬山〜貴船神社(家内と)。仁王門〜頂上(510m)〜貴船神社。紅葉狩りに丁度良い時期。謡曲「鞍馬天狗」の故事を復習。

山行予定

高川山 12/7 針葉樹会山行 石井・山崎・佐雑・三井・蛭川・竹中・金子・西牟田
三井 11/24〜25 沢口山 朝日岳 南ア深南部の初めての山。

蛭川 11/29 明神岳 高校岳友と

12月15日

【出席者】 佐雑 三井 蛭川 竹中 小島 三森 小野 佐藤(力) 「藤沢」高崎(俊) 金子 岡田 本間(記録) * 藤沢さんは小島さんと同期(40年卒)の山岳部員でしたが針葉樹会には入っていない方です。

話題

今年最後の三月会であり、締めくくりの反省会になるかと思っていました。左に非ず。登り残した山をやりたいとか、局地の天気予報が手に入りそうとか、来年は針葉樹会員が2名増えそうだとか、明るい話に尽きました。終わり間際にクレージイ会の方々がなだれ込んで来て、話に花が咲き、1時間時間延長になりましたが、高川山山行のオーション会4名参加といい、会の力は偉大なり、と感じた次第。最近「始まり」、富士山の始まりとか丹沢の誕生とかがよく会の話題になります。箱根の火山誕生展「箱根でみる箱根火山」が開かれています。興味のある方はどうぞ。

始まりは、易しい安全なルートから山歩きをスタートさせますが、そのうち難しいところが残ってしまいます。一方、体力は落ち、ギャップは益々広がってきます、気を付けないと。これ弱気な自戒です。それでは皆様 インフルエンザにもめげず、いよいよお年をお迎えください。

山行報告

針葉樹会山行「高川山」 12/7

山崎・石原・佐雑・松尾・石和田・高崎(治)・山本(尚)・三井・蛭川・竹中・中村(雅)・金子・西牟田・本間 以上14名

初狩駅からの登りは女坂経由でコースタイムで山頂に。頂上は人だらけ。ゆっくり昼をとって下りにかかり、急なところがありました。無事クリヤーし後はボコボコ下りました。休憩込みで4〜5時間の山行が我々にはピッタリと、感じました。山中で山崎さんの「地学講座」が急遽開かれました。丹沢が本土に衝突した結果?というお話でしたが、会で改めてお聞きしたいと思います。

人の多さにびっくり。一転下りの人の少なさにびっくり(金子)。

天気がすばらしかった(蛭川・三井)。
年賀状用の富士山が撮影できました(竹中)。

個人山行

佐雑 11/26 (箱根) 湖尻峠〜矢倉沢峠 単独
12/3 弘法山 単独

三井 毎日新聞ツアーで南アの最深处に行く
11/25 山犬の段、沢口山、寸又峽
/ 26 寸又峽より朝日岳往復(8時間) 寸又峽

温泉(7時間)

竹中 12/13 宮が瀬ダム周辺ウォーク(如水会
町田支部歩こう会参加)

小島 12/8 (箱根) 鷹巣山・浅間山

三森 11/2 (日光) 太郎山 元会社の仲間と二

入で。猿に合う。素晴らしい紅葉でした。

高崎(俊) 11/14 塔ノ岳(大倉尾根往復)

11/22 麦草峠。国道閉鎖。雪を踏めた。

12/22 塔ノ岳(政次郎)新大日(大倉尾根)

バカ尾根を登るパーティ多数

岡田 10/30 碓氷峠。横川駅(旧中仙道)軽井

沢駅

金子 11/22 天祖山。最後の紅葉。但しナカナ

力急な上下で太ももが痛くなった(日原より往

復)

山行計画

佐藤 高麗山、懇親山行下見

2月 天狗岳、唐沢鉱泉集合

三井 2月(九州)阿蘇山・久住山 雪山登山?

蛭川 未定 金冠山+温泉

小野 年内と年明けにニセコ

金子 12/27(30) 仙丈・甲斐駒。昨年失敗の再

挑戦

1月19日

【出席者】 石井 山崎 中川 三井 遠藤 高橋

(信) 蛭川 小島 高崎(俊) 佐藤(久) 岡

田 中村(雅) 西牟田 本間(記録)

新年の集いとはいえ、大勢参加され幸良いス

タートとなりました。こちらで第二次海外遠征が話題になれば、あちらでは博識の山崎さん高橋さんがプレートテクトニクスを論ずるといふ具合でなかなかの盛況で、そういえば珍しくゴルフの話も。まえに石井さんがこの会はゴルフが話題にならないな〜と感心か、呆れてましたが。中川さんが出席されたからかな?

山行幹事の三井さんから共通テーマということで、今年の針葉樹会山行の案内がありました。アタジオは5月16日(日)〜17日(月)で決まりましたが、3月の丹沢・三ノ塔が日時未定でしたのでこの場で15日(日)と決まりました。この他にも2、3山行を予定しておりますとのこと。

山行記録のノートも残りが少なくなつてまいりました。新しいノートは大判の大学ノートに換えようかと思えます。山行内容をもつちよつと詳しく、登降ルート、タイム、難所などを書いてもらつと参考になりますので。小生丹沢の大山北尾根、蛭ヶ岳直登では記録にあつた山本(健)さん、山崎さんにいろいろお聞きしましたが、初めてのルートをひとりて歩く時には、しかもガイドブックにも載つてないとなると本当に有難いものです。これはという山・ルートは是非詳しく記入してください。

山行記録

蛭川 1/14 石砂山(いしすな)川上ドツケ。今年はドツ

ケを狙います。

岡田 12/25 松洞丸。中村雅明氏と

本間 1/5(6) 塔ノ岳(大倉尾根)塔ノ岳(尊仏の土平)雨山峠(寄)。恒例の尊仏詣。ユースンルートは玄倉林道のトンネル閉鎖のため雨山峠越え一本になりました。

山行予定

三井 1/21 南高尾山稜。クラスメイト12人と

2月 阿蘇山・久住山。毎日新聞旅行ツアー(雪

山)

高橋 2/17 高取山(大山)。クラスメイト3人

と、栗原から

蛭川 1/26 高ボツチ。ちよつと冬山気分を味

わう

本間 2月 洪沢丘陵。下見のため

わう

平成20年度会費納入のお願い

平成20年度の会費納入をお願い致します。納入状況等に関するお問合せがありましたら、会計幹事までEメール/電話にてお問合せ下さい。

会費納入先銀行口座

- (1) 銀行名 三菱東京UFJ銀行
- (2) 口座名 針葉樹会
- (3) 口座番号 普通口座 4825647
- (4) 振込時「摘要欄」にお名前(卒年次)を「ミヤシタ(S57)」等記入下さい。

会費額 卒業年次によって左記のようになって
います。

昭29年以前の卒業(昭29を含む)	免除
昭30～42年の卒業	4000円
昭43～62年の卒業	6000円
昭63年以降の卒業	5000円

幹事連絡先

宮下 克彦(昭57卒)
E-Mail Kat.Miyashita@nitsui-steel.com
電話(会社) 03 55444 6925
Fax(会社) 03 55444 6483
(三井物産スチール・第二部門造船鋼材部)

編集後記

本号の最終校正の段階で近藤泰会員(昭53)の妙高での悲報が入りました。次号にて皆様と共に近藤会員を偲ぶことといたしたく存じます。今は同会員の御冥福を衷心よりお祈りいたします。

前号の遅れの影響もあって、本号の発行も約一カ月遅れましたが、内容的には会員の皆様のご協力により充実したものとなりました。

石原氏の戦後の部活動の復活、中村会員の疲れを知らぬチベットの東への探求、遠藤さん等の夢あふれるキリマンジャロ紀行、金子会員の雪山賛歌、そして山田さんのクライマー魂。そんな中で若林さんの思い出話と、斉藤さんのお子様との飯豊登山、田形さんのアジアでの交流、温かなものを感じます。これからも会員の皆様の「色々な山」を御紹介する場としていきたいとの念を強くしました。(小島)

今号の編集中に近藤泰さん遭難の報が飛び込んできました。針葉樹会の活動にも積極的に関わってくれていただけに無念でなりません。次号に追悼特集を掲載したいと思えます。

私はヤマ、つまり所沢の雑木林に毎週入って手入れを続けてますが、それが縁で奥多摩のプライベートな林業塾で月一回、山仕事を教わるようになり

ました。先生は新島敏行さんという小丹波の樵の大ベテラン。入門すると、まずは焚き火の起こし方を先生のやり方を見て覚えます。火を起こすのは、「一年生」の仕事なんだそうです。杉の枯葉を焚きつけにするとところは予想通りでしたが、それから後は生木でもよく燃えるのはカシヤアブラチャンだとか、新たに知ることばかりで勉強になります。昔は怖かったらしいですが話の面白い先生で、一日の作業のうち半分は焚き火を囲んで先生の雑談をうかがうという、じつに中高年向けの修業で、豊富で深い山の智慧に感心させられることしきりです。(井草)

この数年、冬場の最大の楽しみは山スキーで、そのほとんどが近藤さんと兵藤さんの企画によるものでした。お会いする日数こそわずかでしたが、自分にとってもっとも爽快ですばらしい時間を何年にもわたって与えていただきました。そんな山行を思い返すとき、どの場面でも近藤さんの愉快な笑い声が響いてきます。妙高でも日焼けで赤くなった鼻先にサングラスをひっかけ、快心の滑りをなさっていたことでしょう。事故は避けがたい。命はかない。でも現実を受け止めがたい。そのあとの言葉は……ちよっと見つかりません。合掌。(川名)